
スナイパー & アサルト

ワヨン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

スナイパー&アサルト

【Nコード】

N1846S

【作者名】

ワラン

【あらすじ】

オンラインシューティングゲームで親友と遊んでたらフラッシュ食らってパソコン画面は真っ白！

ついでに自分達も真っ白！気づいたら二人して軍の医療室！まさかのゲームの世界にイン！？

狙撃手と歩兵のコンビが異世界トリップで世界戦争旅行！

第一発目

「おい、咲樹
今日もやるか！」

俺、加藤咲樹（１７）

放課後の教室掃除がちょうど終わると教室に出て呼び声に答える

「ああ、狙い撃ちまくりぜ」

成績は普通、家は居酒屋で夕方からは両親は仕事
ちなみに年齢「彼女いない歴という悲しい現実
身長も悲しいことに少々低め

容姿は普通だが、たまに子供か女に間違われた
女に間違われてから髪を短くしたが、今度は身長で小学生高学年に
間違われた

なので髪は伸ばして顔を隠している

そして廊下待っていた親友とともに下駄箱へ向かう

親友もとい幼なじみの名前は、

倉橋薫（１８）

年は一つ上だがほとんど兄弟のように育ってきた兄のような存在だ
自分の容姿で中学の時は一時期イジメがあった

だが、薫がイジメの黒幕を暴力というシンプルで黙らせたのだ
拳一発で

それからイジメが起きなくなり薫と一緒にいる時間が多くなった

容姿は薄い茶髪に短いスポーツヘア

両親が共にボクシング関係の仕事なため腕っぷしが強いのだ

しかし、喧嘩はあまりせず成績は普通
普通の生徒である

そして二人が向かっているのはゲーセンにあるネットカフェ

二人が中学時代に見つけたオンラインゲームをやるためである

暇つぶしに二人で寄った際に見つけたFPSシューティング
ゲームであり、戦闘機など使えないがクレイモアやRPGなどとい
った現代戦争物であり自分が一人の軍人となりミッションをオンラ
インでクリアしながら世界を回るというゲームだ
もちろんチームデスマッチなど対戦などもでき、人気のゲームである
名前は

「第三次世界大戦」

ちよつとベターだが内容はネットゲームにしては豊富なためあまり
気にされていない

「じゃあ、咲樹
先制頼むぜ？」

「ああ、いつも通りやるよ」

薫は突撃兵を好んで使う

AKI47、IMIガリルなどアサルトライフルやグルガナイフなどを得意として敵を混乱させることをよくやってくれる

そして俺が

「ん、ふっ・・・よし、通路空いたよ」

狙撃手を狙撃し、薫に伝える

俺はスナイパー

素早く狙撃し、一撃離脱を得意としてるが乱戦での狙撃も得意だ
SAKOTRGI21やWA2000、L96A1などあるが、俺はTRGI21を最も使っている

どのスナイパーライフルも威力はいいが、

こいつは命中率が高くオートマチックではなくボルトアクションなため、一撃が強い

一撃離脱にはうってつけた

俺と薫はそのまま通路を進む

すると、カランコロンと物体が自分達の前に飛び出す

（グレネード！？

いや、形が違う・・・まさ）

「後ろ向け、咲樹！」

いち早く気づいた薫は指示を出す但時既に遅し

俺達の視界は一面、真っ白に包まれた

・ ・ ・ 二人の少年が借りた部屋には誰もおらず、この時、二人の存在は消えた

第二発目（前書き）

とりあえずよくあるパターンでござめんなさい

第二発目

「起きろ、サキ中尉！」

（うつせえ、誰だよこんな大声で起こす奴）

咲樹はゆっくり身体を起こし、目を開くと辺りは迷彩服を来た外国人・・・

例えるならアメリカ人のような人が忙しく動き回ってる
包帯をしてたり傷を塞いだりなどだ

（待て、待て

ここはどこ？日本？地球？

いや、地球か・・・けど目の前の人は黒人のヒゲだ
外国人だけど日本語喋ってる

あれ？俺って、英語こんなに理解できたっけ？

てか、俺はさっきネカフェにいて・・・そうだ薫は！？）

「すいません・・・薫も一緒にいませんでしたか？」

「カオル？」

ああ、アレン大尉のことか？

お前達の部隊は敵の奇襲で壊滅だった

奇跡的に軽傷だったお前達二人だけは回収できたんだがな・・・」

（???何のことだ？

とりあえず、薫はアレンって人か）

「そうですか、アレンは今どちらに？」

咲樹は話を合わせると再び質問する

「今はテントの出口で中尉を待ってるそうだ」

「ありがとうございます」

咲樹はベッドから降りて、テントに向かいながらある違和感に気づく

（やけに胸が重・・・）

胸を確認すると胸があった

触って見ると柔らかな感触・・・本物だ

（胸・・・胸えっ！？）

てか、デケエよ！

発育良すぎだろ！

まて、まて、まてえ！

俺は男だよな？加藤咲樹、17歳

今まで彼女いない普通の男子高校生、プールも海パン
よし、記憶は男だ）

いつの間にかテントの出口についたのか

男達の視線に気付き、慌てて胸から手を離す

「お、咲樹！起きたのか」

「え？誰？」

右を見ると金髪のオールバックの少年というより青年に近い男性が声を掛ける

「アレン、いや薫だ
わかるだろ？」

「薫、よかった」

咲樹はホッと息をつくのも束の間、すぐに問い詰める

「どうしよう、薫

俺、女になっちまった！」

「おわ、ちょ・・・近い
落ち着け！」

薫は咲樹の手を掴むと人目の少ない空いてる車に向かった

「咲樹、落ち着いたか？」

「ああ、なんとか

けど、人目のないところ来てお前・・・」

「し、しねえよ！／／／
俺はそんな野蛮じゃねえ！」

咲樹は自分の身体を抱きしめるかのように一歩後ずさるが薫は慌てて否定した

「いいか、まずは記憶の確認だ

俺達は最後フラッシュバン食らって気絶したよな？」

「ああ、それで気づいたらテントに居て身体は変わってる」

「そのことについてだが、俺が最後使ってたキャラはアレンで大尉だ
髪型はヘルメットわからなかったけど金髪だった

咲樹はどうだ？」

「俺は・・・サキを使って中尉にレベル上がったからキャラコスアイテム貰ってついでに使って・・・そうだレッドチームだから女性キャラだったんだ！

まさか・・・ここって」

「ああ、もしかしたらあのゲーム内かもしれない」

二人は新たな現象に改めてことの重大差に気づかされた

「なあ、俺達

ここで死んだらマジで死ぬのか？」

「だよな、俺達こんな成りだし戦場に出るんだと思うが生き残れるのか？

生きるチャンスは一発のみのゲームに」

「薫・・・」

そうだ

死んだらゲームオーバーの世界

戦闘経験なんて皆無な自分達だ

だけど・・・咲樹は思った

「なあ、薫

確かに俺達、戦闘なんてやったことないけどさ

もしここが第三次世界戦争の世界なら俺達はこの戦争の未来を知ってる

戦い方も知ってる

卑怯でもなんでもしてても生き残ってやろうぜ

ゲームでは五年やって、三回キャラ作り直した敵を倒す勝率80%のコンビだろ？」

「咲樹・・・」

いつも励ましたり、守ったりする咲樹が今回、初めて励ましてくれた
薫はそんな咲樹に嬉しく思い、笑みを浮かべて頭を撫でる

「サンキュー、咲樹

ストーリー知ってたんだ

いつそのこと、とことん卑怯使って生き残ってやろうぜ」

「ああ、生き残ろう」

互いに拳を軽くぶつけ、テントに戻った

堅い決意を秘めて

第三発目（前書き）

短めです

第三発目

「とりあえず、俺の武器はつと・・・課金でカスタマイズしたからな」

「俺も、あのTRGじゃないと無理だ」

二人武器庫に行っており、回収されたはずの武器を探しに来ていた

「お、メイン武器は無事発見」

「これじゃない・・・これは・・・ビンゴ!」

しばらくして探した自分の武器を見つけ、テーブルに置く

「結構、重いんだな」

「ああ、こりゃスナ構えながら移動は無理だな」

実際の重さを体験した二人はサブ、近接用ナイフ、クレイモア、投擲武器、メイン武器を確認すると新たな発見に気づいた

「なあ、普段ゲームだと持てる武器の数とか決まってたけどよ俺達はさ、自由なんだよな」

「だな、って薰!？」

咲樹は何気なしに返事を返しながら薰の方を向くと、投擲グレネードを三つも所持していた

「チートなんて、俺達には関係ねえよ」

「うわぁ、お前とは戦いたくねえわ」

咲樹はちよつと引き気味に薫を見る

メインとサブ二挺だけでもチートなのにグレネードとフラッシュ、スタングレネードまで持ち出しており、クレイモアまであるのだ

白兵戦や市街戦だとかなり有利だろう

「咲樹、お前こそなんだ・・・どんだけ暗殺する気だそれと防御、上げすぎ」

咲樹は替えのマガジンを計20個以上にクレイモアやモーシオンセンサー、心音センサーなど大量に持っている

「サイレンサーあれば結構倒せるからさ」

市街戦だと芋るほうが倒せるんだと思うんだよね」

互いに、驚きながらも戦闘の準備をし、いつでも戦えるようにした

人物紹介（前書き）

二人の簡単な説明

人物紹介

かとうさき
加藤咲樹

高校二年生（17）

肩まである髪で前髪は顔半分を覆うほどである

父は居酒屋の板前

母は会計などホールを担当しており、夕方から深夜までいつも仕事をしている

なので昔から夜は隣の家で過ごすことが多かった

身長は160 165

体重は52 49

階級は中尉で軍属の名前は

サキ＝ミーシア

金髪で腰までのロングヘア前髪は左目を少し隠してるのが特徴
目はサファイアブルーで日系フランス人風の顔立ち

余談だが、身長が少し高くなったことに喜んだ咲樹だが胸がDカップ
プということに肩凝りが酷い代償に素直に喜べなかった

やまざきあおる
山崎薫

高校三年生（18）

軽い茶髪で短めのスポーツヘア

父は元プロボクサーでボクシングジムの社長

母は元ボクシング実況で専業主婦

本来、受験生なのだが体育会系の大学なので推薦をもらい、無事合格を決め、早めに咲樹と遊んでいたのである

咲樹と幼なじみであり、兄的存在

身長 178 180

体重 65 72

階級は大尉で軍属の名前は

アレックス・フォーマット

咲樹と同じく日系フランス人風である

髪は金髪のオールバック

第四発目（前書き）

咲樹の戦場

これはフィクションです

第四発目

『エリアクリアー』

味方の一人が通信でそう告げてくる

今咲樹達がやっているのはアメリカのロサンゼルスにある貨物倉庫が立ち並ぶ港の第三倉庫に来ている

ミッション内容は貨物内にある倉庫内部か倉庫付近にある貨物の爆破である

倉庫にはソ連が対アメリカ用になる偽装された弾薬類があり、フランスからの情報により破壊するミッションである

『咲樹、仕掛けるから後方警戒頼む』

薫はそう伝えたと咲樹が狙撃しやすい位地にC4爆弾を仕掛ける

解除されても狙撃で防ぐためだ

爆破ミッションの定石である

薫が設置し、味方と共に爆破地点から離れる

すると大きな銃声が響くと薫の横にいた味方の頭が吹き飛んだ
ブシャーと勢いよく脳内の臓物と血が吹き出した

「ダイン曹長！」

「バカ、隠れろ！咲樹！」

『了解』

慌てて仲間の亡骸に手を伸ばす味方を無理やり引きずり、急いで物陰に隠れる

そして咲樹はスコープを覗いた

（あれか、狙撃手は

あとはあのアサルト

情報だとあと一人いるはず・・・

まあ、いい）

ドン、ドンと確実に敵を倒すと通信を繋ぐ

「薫、狙撃手は倒した

早く離れろ」

咲樹はそう言うした後方から自分のところに繋がってる通路を警戒する

（戦場って言うても、ここはゲーム内

こっちに回り込んでくる奴は・・・）

「やっぱりな・・・」

咲樹の予想通り、通路から残り一人の敵が出てきた

待ち構えてた咲樹はスコープを覗くと相手の胸に狙いを絞り引き金を引いた

銃弾は相手の胸に当たり、敵は力無く倒れ、息を引き取る
そして数秒後、大きな音を発てながら倉庫は爆破された

「例え、ゲーム内の世界でも俺は死ぬかもしれないんだ
生きるために戦ってるんだ」

咲樹はゲームをしてた時と違って、確実に人を殺した罪悪感を感じ
ながら合流した薫達と共に港を出た

第四発目（後書き）

うまく書けてる心配しながら投稿してます（＾－＾）；

第五発目（前書き）

殺した自覚と改めて感じたゲーム内でのゲームの違い

第五発目

「ふいゝ、疲れた」

「ははは、先シャワー使うぞ」

「ああ、わかった」

宿舎の自室ついた咲樹はベッドにダイブしながら薫に手を振り、返事をする

ゲーム内に来てから一週間

咲樹達はこの生活にだいぶ慣れた

最初は銃の扱いにこそ、手こずったものの今はお手の物だしかし・・・

（俺は人を殺したんだよな

この手で・・・）

咲樹は自分の手のひらを見つめる

銃で殺した時はそこまで実感はなかったが、一度だけゲリラ戦ミッションがありナイフを使った時があった

その時はナイフで倒したものの感じた感触は今でも忘れない

相手は死にもの狂い

ピリピリとした殺気と鋭く光る刃

ストリーを知ってた咲樹はナイフかわすとグルガナイフを相手の胸に刺す

肉を抉り、刺さった感触

相手の口から血がこぼれ、抜いたグルガを伝って手に血が伝わる

初めての確実な死と振り掛かる恐怖心に咲樹は思わず、吐いてしまった

その時は薫の手助けで立ち直れたものの今でも鮮明に思い出せる

（薫がいなかったら確実に潰れてたな、俺）

親友の存在のありがたみを感じていると薫がシャワー室から出てきていた

「ほれ、飯用意しとくからシャワー行ってこい」

「サンキュー」

そう礼を言って、俺はシャワー室に向かった

咲樹がシャワー室に行くと俺はキッチンに向かう

冷蔵庫にある軍用食をテキパキと手順に従って作って行く

「こつちに来て一週間か」

薫は冷めた声で呟く

こつちの世界に来た初日

俺たちは銃の試し撃ちなどやるため簡単なものからやることにした

『チームデスマッチ』

ステージはソ連給油用港に停泊している大型貨物船内がステージになっている

最初は銃の操作の仕方の確認などのため、威嚇射撃も兼ねて撃ち、次にある確認のためしばらく二人で行動していた

咲樹が狙撃で俺が近づく敵からの援護

銃を撃ちながら、俺は容赦なく敵を撃つ

頭が吹き飛んだり、腹が蜂の巣になって臓物が吹き飛んだり、クレイモアなど地雷やグレネードの餌食になって、下半身が吹き飛んだ光景など見ていたがはつきりと殺人を感じたわけではなかった

すると、その時咲樹が呟いた言葉が蘇る

「やっぱりデスマでも死んだら終わりなんだな

さつきスコープ越しに仲間の死体見たけど消えてない

通信で確認したら生き返ったわけじゃなく新たな『増援』だった

確実に死ぬんだな」

諦めを含んだような呟き

同じ境遇だからこそ、その呟きを薫は感じた

慰めてやろうとしたが、そこで心音センサーに反応があることに気づく

（これは・・・近い！）

狙撃している部屋のドアの前

薫は素早くドアに駆け寄る

ドアが蹴破られたのと同時に薫はナイフを投擲

悲鳴をあげることもできずに絶命した敵の顔面に深々と刺さったナイフを抜くとそのまま後ろの敵に仕掛ける

「殺らなければ殺られる

俺が死ねば咲樹が死ぬ」

死にたくない気持ちと守りたい気持ちがある薫は容赦なくナイフを振るった

ナイフの刃は敵の顔面を切る

刃は顔の眼球を貫き、そのまま横一閃

顔が割れ、倒れた死体の頭部には脳の臓物と血が溢れ、出ていたグロテスクな光景に吐きそうな感覚をグッと堪える

「・・・っつ！！

咲樹、敵は倒した」

「ありがと・・・って、大丈夫かよ！？

顔色、真っ青じゃねえか！」

ドアから出てきた薫の表情に警戒体勢を解いた咲樹は急いで駆け寄る

「大丈夫だ

弾食らったわけじゃねえから安心しろって」

「でも・・・」

頭を軽くポンポンと叩いて薫は笑顔を浮かべて安心させる

「けど、結構キツかったんだよね
今は慣れてきたけどよ・・・」

薫は苦笑を浮かべながら皿をテーブルに運ぶ
殺すことには今でも抵抗がある
ナイフを持つ時は尚更だ

けど、生き残るために殺す
戦場ではそれが常識なんだろう――

「あちー

薫、飯できた？」

「ん？ああ、できた・・・ぞ」

「ん？どした、薫？」

咲樹は黒のＴシャツに下着（女物）で頭にタオルを被ってる姿
年頃の男子なら反応しないはずがない

勿論、薫は外見が大人っぽくても中身は健全な男子高校生だ
みるみるうちに顔は赤みを帯びていく

「だあゝ、毎度毎度！

服を着ろー！／／／

テメエ、襲うぞ、咲樹！」

「あ・・・

いやゝ、長年の癖でつい」

咲樹は苦笑を浮かべながらクローゼットから服を出すと脱兎の如く、シャワー室に戻る

「ったく、一週間も経ってるのにまだ女だと自覚してねえのかよ」

手間の掛かる弟？もとい親友に笑みを浮かべる薫だった

番外編1（前書き）

ゲームにインして二日目

新たに発覚した二人の関係と新キャラの登場です！

＼（＾＾）／

番外編 1

「ここが軍の宿舎か」

「なんつーか、ビルだな」

二人は左右に自分の武器など荷物の入ったカバンを持ち、目の前の巨大なビルを見上げる

この世界に来てから二日目

あの目が覚めたテントからすぐに異動命令が出され、一度、軍の宿舎に帰ることになった

ここでは、ミッションの受付や報酬の受領も兼ねてるらしい
とりあえず、二人は中に入った

すると受付の金髪の女の子が笑顔で迎えてくれた

「あ、おかえり！二人とも」

「た、ただいま」

いきなりの出迎えについていけず、苦笑しながら返事をする
しかし、その反応に不満なのかプクリと可愛らしく頬を膨らます

「いつもみたいに「メアリー、ただいま！」って抱きついて来ない
なんて・・・咲樹、戦場で頭でも打って幼なじみの私を忘れたの
アレンまで同じような感じだし・・・」

受付の娘・・・メアリーは首を傾げながら二人を見る
そして、原因の二人は同時に思った

（（このキャラの生活なんて知らねえーよ！））

二人はチラリと互いに目を向けるとサツと後ろをメアリーに背を向ける

「どうすんだ、薫！？」

俺、どんなキャラなんだよ！？」

「落ち着け、咲樹！

俺だって同じように感じてんだよ！

とりあえず、謝って・・・」

「謝って、その後は？」

「敵のグレネードの衝撃で二人して頭打ったことにしよう・・・
さすがに、中身は異世界の人間です
なんて信じねえだろ・・・」

「だな、そうしよう

あ、口調は・・・女らしくじゃないとダメなのか？」

「当たり前だろ？」

「くそう！

なんで、キャラコス女にしたんだ！」

互いに、小声で作戦タイム

咲樹は女キャラにした過去の自分に悔しさが募り、殺意が沸いた

すると、コソコソ話す二人に痺れを切らしたメアリーは軽く怒り気味に訪ねる

「ちょっと二人とも」

いくら二人が恋人同士って言っても幼なじみの目の前であからさまにコソコソ話されるのは感心しないよ？」

（（恋人同士！？））

背を向けているため驚いた表情を見られなかったが二人の心情は乱れまくっていた

「すまん、メアリー

俺たち昨日、相手グレネードの衝撃で頭打ちまっとな

悪い、今日は早めに休みたいんだ

部屋どこだっけ？」

「ごめんね、メアリー

埋め合わせは必ずするから！」

二人は咄嗟の演技でメアリーを誤魔化す

そんな二人の誤魔化しにメアリーは気づくことなく、盛大な溜め息をついて、二人に鍵を投げる

「全く・・・

さっさと休んでそのおかしくなった頭を治して来てよ」

二人は鍵を受けとり、急ぎ足で鍵の番号ね部屋に向かう

『ガチャ、キー、ドサツ、ボフン!』

ドアを開け、荷物を置き、二人はベットに身を投げる

「なんか・・・疲れた」

「同感・・・」

このキャラは明るい奴みたいだな」

「ああ、しかも俺のキャラと恋人だとよ・・・」

互いに盛大な溜め息

いきなり恋人同士だと言われてもすんなり受け入れるはずがなく、二人にはどうしようもなかった

しかし、周りがそれを受け入れるはずもないことがわかっている二人は・・・

「とりあえず、メアリーの前では恋人を演じなきゃなんないぞ」

「わかってるさ・・・疲れるよな、女の振りとか」

「諦める・・・」

「親友の苦勞を容赦なく切り捨てやがって」

「俺にはどうしようもねーよ
女キャラコス、選んだ過去の自分を恨むんだな」

「過去の自分、殺してー！」

咲樹は怒りを枕にぶつけながら悔やみ、薫は内心で男キャラを選んだ過去の自分を誉めていた

その日の夜、シャワーを浴びている咲樹を待つてる薫はベットに横になりながら一人悩んでいた

（恋人かぁ・・・

今まで誰かと付き合ったことないんだよな・・・）

今まで誰かに告白されたことあるが自分の好みの相手ではなく、ことごとく振って来ているのである

（なんつーか、気の許せる相手でロングヘアの女がいいんだよな・・・）

そんなことを考えているとフツと今の親友が思い浮かぶが・・・

（なんで咲樹が思い浮かぶんだよ！

俺はホモか！アイツは男の親友だぞ！

けど、今は女・・・）

「っじゃねえよ！」

薫は頭を抱えながら飛び起きる
すると、目の前には親友が立っていた

「ビツクリしたな〜．．
いきなり大声出すなよ」

咲樹はそう言うと言つと自分のバックを開け、ゴソゴソと中身を漁る
薫は数秒固まり、咲樹の姿を見て、口をパクパクさせた

「お．．おまつ、その格好／＼／／／」

「んっ？」

ああ、下着持つてくの忘れてたから取りに来たんだ
別にいつも風呂上がりはこんなんだろ？」

確かに咲樹の家に泊まりに行つてゐる時、咲樹は上半身裸でうつろつく
癖があるが、それは男の場合の話である

薫から見た今の咲樹には
サクランボ付きのメロンのような肉まんみたいなアレ
風呂上がりのためか濡れてる金髪の髪と赤くなつた顔が色っぽく見
えている

男の薫にとって心臓鷲掴みの光景だ

「お前は今は女だろうが！
さっさとシャワー室で服来てこい！／＼／／／」

「あ・・・そうだった」

咲樹はバックごと持って、シャワー室に向かう
それを確認すると薫はぐつと拳を握る

「よく耐えた、俺の理性！」

薫はそう自分を褒め称える

こうして夜は更けていくがこれから何日間は、咲樹が再び薫の理性をガリガリ削るとはまだ知らない

第六発目（前書き）

戦時中に二人の任務とは・・・

第六発目

「ふあゝ、ねむ・・・」

ベッドからもぞもぞと這い出た咲樹は着替えを持って洗面所に向かう

「中々、慣れないな・・・
いや、慣れたくない」

そう呟きながら女物である軍服を着ていき、母親がしていた化粧のやり方の記憶を頼りにわかる範囲でしていく

一度、化粧などしないで行ったらすっかり仲良なったメアリーに怒鳴られてしまい、咲樹は嫌々、渋々、荷物に入ってた化粧品を手にした

「あとは、これつけてっと・・・」

階級を示すマークと名前、軍名が入ったバッチを付ける

ユーラシア合衆国軍

特殊部隊所属

サキ＝ミ－シリア中尉

ここでこの世界の説明を付け加えよう

この世界は大まかに四つの勢力に別れている

ヨーロッパ大陸とアフリカ大陸が合わさったユーラシア連邦軍
アメリカ大陸と南アメリカ大陸が合わさったアメリカ連合軍

ロシア大陸と北朝鮮の北ロシア軍
北朝鮮とロシアを除いたアジア国とオーストラリアのアジア連盟軍
である

今は世界中が戦争に包まれているが、その原因は北朝鮮とロシアの
宣戦布告である

核ミサイルの韓国、中国国境付近への発射
国境付近の自国の民間人もろ共である

これにより、韓国と中国はほとんど機能が停止し、すぐに第三射が
日本に撃たれた

沖縄の軍が迎撃すると思いきや、アメリカ軍は迎撃空域に間に合わ
ず、待機していた日本自衛隊空軍の迎撃により被害は中国地方沿岸
部のみで抑えれどもものの迎撃した自衛隊は全滅
沿岸部の津波により、自然災害にも繋がった

これを期に、日本政府はアメリカ沖縄基地の撤去と条約の撤廃を決意
アメリカとの関係を断ち切る

そして自衛隊を派遣し、中国、韓国に支援を送り、同盟を結ぶ

そして、ヨーロッパは警戒態勢で待機する

ソ連は核ミサイルをアメリカ、ドイツに二発ずつ発射したが両国は
すぐに対応した

これから世界中が戦火に包まれた

そして現在、圧倒的物量の北ロシアとアメリカ連合軍が圧勝すると思
いきや、両軍に挟まれながらも生き残っているアジア連盟は、
韓国やオーストラリア、日本による技術力によって最新兵器を開
発した

ヨーロッパも各国が同盟を結び、戦力を集結させたユーラシア連邦軍
中でもドイツ軍が先頭に立って、指揮をし、戦力の増加に貢献して

いたのは第二次世界大戦の汚名返上だろう
ドイツは優秀な戦術でソ連にとって強固な国境沿いの壁になっているのだ

サキと薫が所属しているのはユーラシア連邦軍の中でも特殊部隊
エース部隊だ

だからこそ、この戦時中に前線に出ることは多くなるため・・・

ガチャリ

「お、起きたか咲樹」

「おはよー、薫
どこに行ってたの？」

「おはようさん
お前が熟睡している間に召集掛かってな
ライデン隊長からの任務が掛かったな、今すぐに荷物まとめるぞ」

「今すぐ！？任務内容は？」

「聞いて驚け、新婚旅行だ」

「ハア！？」

薫の悪戯っぽい笑みに咲樹は眠気も吹っ飛び、言われた通りに驚き

の
声
を
挙
げ
た

.

第七発目（前書き）

新婚旅行の内容は・・・

第七発目

「それじゃあ、くれぐれも気をつけてくれ
生きて帰ってこい、健闘を祈る」

「了解！」

咲樹と薫はこの世界で初めて出会ったむさ苦しいヒゲオヤジ・・・
もといライデン隊長に敬礼をして電車に乗り込んだ

薫はグレーのシャツに黒のジャケットとサングラスにジーンズ
咲樹は薄赤いノースリーブのワンピースに黄緑色の上着に麦わら帽子
片手に荷物を持ちながら、もう片方は腕を組んでいる

端から見れば絵になる新婚夫婦で今から新婚旅行をしてる最中だと思っ
だろう

しかし、実際は・・・

「はあ、なんで任務で女装しないといけないんだよ」

「女装じゃなくて正装だろ・・・」

それに潜入任務か・・・
ゲームではなかったミッションだな・・・」

「しかもよりにもよって日本だぜ？」

「どういう偶然だよ」

「それは同感だな・・・」

「けどまあ、日本の技術力を見て来いって任務だ
金もかなり貰ってる
気軽に行こうぜ？」

「はあ、わかったよ」

咲樹はため息を吐くと薫が笑顔で肩に腕を回す

「俺たちは新婚夫婦をだぜ？
笑顔だ、マイハニー」

「・・・ええ、そうだったわね
アナタ」

薫の一言に若干ひきつらせながらも笑顔で答える咲樹
しかし、すぐに小声で低く呟く

「デメエ、帰ったら覚えとけよ・・・」

「はっ、帰ったらやり返せないくらいに弄ってやるよ」

咲樹の一言に薫は挑戦的な言葉で返した

第八発目（前書き）

新たな現実には二人は絶句
今回は若干、薰視点

第八発目

基地を出てからかれこれ二十時間・・・咲樹と薫はやつと東京の成田空港に到着した

「疲れた」

ずっと座りっぱなしも体に悪いな」

咲樹は大きく伸びをしながら空港の改札口を通る

その手にはローラー付きのバックだけで武器など入ったバックは持っていない

そのバックの行方かというと・・・

「咲樹！自分の荷物を人に押しつけんな！」

薫はいかにも重い（武器一式が入っている）バックを掲げるが咲樹は余裕の笑みを浮かべて、返事をする

「あら？大事な愛しい奥さんに重い荷物を持たせるの？」

「・・・こんな時だけ女面しやがって」

「何か言った、アナタ？（勝ったな）」

「何でもないよ（この借り、後で必ず返す！）」

ラブラブ夫婦が互いに極上スマイルだが、内心では咲樹は勝者の笑み

薫は敗者の悔しさを感じていた

空港を出てからお金を日本円に変え、レンタカーを借りた二人はそのまま市街をぐるりと回る

「戦時中だって言うのにあんま変わんないな」

「ああ、少し人が減ったくらいだな」

東京の市街の人だかりは前いた世界と変わらず道は歩く人間に埋もれ、タクシーや車は渋滞に見回れていた

「あ、俺たちの家どうなってるかな？」

「ないかも知れないが行ってみるか」

咲樹の提案に薫はハンドルを池袋方面に向けた

しばらくして着いた家の場所に二人は目を疑った

見た目、表札

どれも自分たちがいた世界と同じ光景だった

すると咲樹の家のドアがガチャリと開いた

「あら？」

「こんにちは、ここはまだ準備中よ？」

「母さ、すいませんでした」

実は新婚旅行で日本に来てたんです

俺たちは昔、こちら辺に住んでまして懐かしく思いながら街を回ってたとこなんです」

薫は慌てて咲樹を胸に抱き寄せながら、笑顔で咲樹の母に説明する

「あら、新婚さんなのね
いいわね

私の息子も早く大きくなつていいお嫁さんを連れて来てくれないかしら」

咲樹の母の言葉に二人は絶句した

息子という言葉に・・・

「あの昔、ここに何度か来たことがあるんですが、もしかして息子さんの名前は・・・咲樹君でしょうか？」

薫は胸元に抱き寄せた咲樹が微かに震えているのを感じながら恐る恐る聞く

声が震えないように必死に堪えながら・・・

「あら、そうなの？」

確かに息子は咲樹よ・・・

ほら、ちょうど良かったわ

あの背の小さい方が咲樹よ」

「え・・・？」

薫の家から出てきた制服を来た二人の男子を目にした時、二人は絶望に陥った感覚を味わった

そこには『自分』がいたのだ

「薫・・・俺・・・」

「えっ・・・おい!？」

咲樹は微かにそう呟くと薫の腕の中で気を失う

「あら、大丈夫なの!？」

「あ、はい

こいつ今、女性のアレでして
今からホテルに行くので大丈夫です
ご心配なく

それでは、また縁があれば・・・」

薫はとつさに思い付いた嘘で挨拶をし、車に乗り込み、アクセルを踏む

「とつさに思い付いた自分よ、よくやった!」

と自分を誉めつつ、薫は急いでぐっすり休めるホテルを探した

.

第九発目（前書き）

最近、忙しくてまともに書けてるか不安です・・・

第九発目

東京の街中で見つけた結構高い高級ホテルに着いた薫は背中に二人分の荷物を背負い、お姫様抱っこで咲樹を部屋まで運ぶと荷物を放り捨て、咲樹と共にベッドに倒れ込む

「まるでドッペルゲンガーだな・・・
いや、俺は今、『別人』か
咲樹も・・・」

住む場所、家族、友人、そして薫と咲樹としての『存在』
それら全てを奪われたかのように感じた

自分を見た時は吐きそうになったが咲樹が気を失ったため、すぐに収まった

自分を知ってるのは咲樹だけ
そう思うと咲樹の存在がとても大切に感じた

「咲樹だけは絶対失ってたまるか・・・
家族や自分を失っても咲樹だけは失わねえ
戦場で近づく敵はもう容赦はしない」

自分に言い聞かせるように呟くと隣に寝ている咲樹を胸に抱き寄せ、意識を深い眠りに落とした

「じゃあ、また明日な」

「ああ、おやすみ」

「おやすみ」

夜遅くまでオンラインゲームをやっていた咲樹は薫と玄関で別れると家の戸を開く

「ただいま」

いつも通りに靴を脱ごうとしたが、母の一言に固まった

「あの、どちら様でしょうか？」

あら、もしかして咲樹の彼女さん？

可愛い娘ね、外人さんかしら？」

「えっ？」

目の前で嬉しそうに喜ぶ母に咲樹は玄関の鏡に目を向ける

輝くような金髪にフランス人ハーフのように整った顔立ちキュツとしまったお腹にスラリと伸びている色白の足

女の象徴とも言えるふつくらとした大きな胸

「私は、だ・れ？」

（私？）

咲樹は背中に嫌な汗を流しながら、自分の声に疑問を浮かべる

「あれ？母さん、お客さん？」

そう言いながら出てきたのは・・・自分自身だった

「あら、咲樹

あなた、いつの間にこんな可愛い彼女さん作ったのよ」

「何言つてんだよ、母さん
俺、彼女いないけど？」

「じゃあ、お知り合いさん？」

「んゝ、誰だっけ？」

そのやり取りにだんだん足元から闇に取り込まれて行く

まるで自分の存在がなくなっていくかのように・・・

そして男の自分が目を大きくし、自分に近づく

「思い出した・・・」

「やめる・・・」

近づく自分がまるで死神に見える・・・
咲樹はその先の言葉を聞きたくなかった

逃げようとドアを開けようとしたが、なぜか開かなかった

「だめよ、ちゃんと現実を受け止めなくちゃ」

「うわぁ!!」

いつの間にいたのだろうか・・・

自分の母親が背後から抱きつき逃がさないようにガッチリ腕を回す

「そうそう、あんたは」

「やめてくれ・・・頼む
言わないでくれ・・・」

「アハハ、ダメだよ」

必死に懇願するも男の自分は笑いながら拒否し、耳元で死刑宣告の
ように囁いた

「やめろおお!!」

「ここはあなたの居場所はじゃないぜ？
女の子のサキちゃん」

認めたくない言葉が脳内を支配し、目の前が暗くなる

（俺は・・・俺は咲樹だ！
サキじゃない・・・）

「・・・き」

涙を流したくなる感覚を抑え、認めたくないことの最後の抵抗のよ
うに頂垂れると誰かの声が聞こえてくる

「・・・き、さき」

この声は・・・

「起きろ、バカ咲樹！
起きねえと、犯すぞ！」

「つてえ！？」

頭に強烈な痛みが走ると咲樹は跳ね起きて、頭を抑える

「テメエ、何し・・・悪夢でも見たか？」

薫の一言に咲樹の表情は段々と怒りから悲しみに変わっていく

「俺・・・自分の存在がなくなって・・・もう元の世界に戻れない
って、わかってても・・・認めたくなくて」

「わかった、わかったから
我慢しないで、泣いちまえて」

「う・・・ぐ、ひぐっ」

男の時の名残なのだろう

咲樹は声を押し殺しながら静かに泣き、薫もそんな咲樹につられ、
涙を少し溢した・・・

.

第十発目（前書き）

仕事の多忙さに更新が遅くなりました

もう心身共に疲れきってます

ほんとすみません・・・

次回は戦闘の話がメインです

第十発目

「んゝ、寝ちゃったのか」

咲樹は小さく欠伸をしながらパチリと目が覚める

視界が暗いのは電気がついていないのだろう

明かりをつけようとベッドから起きようとしたが身動きが取れなかった

「あれ？もしかして薫？」

だんだん目が慣れて来たのか目の前にはうつすらと薫の顔があり横に顔を動かせば白いたくましい腕

つまり抱きしめられてることに今更ながら気づくのであった

「ちょ、俺、何もしてないよな？されてないよな？」

身体を確認するが服は乱れていないことに安心し、落ち着きを取り戻す

「薫・・・薫がいてくれなかったら俺、潰れてたな

ゲームの世界に来て、女になって、あげくに家族は違う世界の人間って改めて思っても奪われたと感じまう・・・

ついでに、人殺しまでやる職業だ

一人だったら確実に死んでるよ」

何度も大切だと感じたが今回のことで改めて一層強く大切さに気がついた

同時にいつも助けしてくれる親友を今度は自分が助けてあげたいと思うのだ

（何ができるんだろう？）

そんなことを薫の腕の中で頭を悩ませていると突如、大きな爆発音が聞こえた

「なんだ！？」

咲樹は薫の腕から逃れると窓から外を見る

見れば高層ビルから所々、煙が立ち上り、周辺からも砂煙が上がっていた

「よく見えない・・・
そうだ！」

咲樹はバックを開けると次々と機器を組み立てていく

「安全装置は着けておこう・・・」

構えたのは迷彩が入った長い銃身であるTRG
スコープを覗き、高層ビル周辺を見た

「これは・・・テロ！？」

スコープ越しに見えたのは銃を発砲している外国人だった

「自衛隊は何をやってるんだ！
一般人を撃ってるんだぞ！？」

・・・・・・・・

サイレンサーはあったはず・・・」

咲樹はサイレンサーの確認をすると再び組み立てたTRGをすぐに組み立てれる程度に解体しバックに入れるとドアに向かおうとする

しかし

「どこに行くんだ、咲樹」

「っ！？」

咲樹が振り向けば薫がベッドに起き上がってる形でこちらを見ていた

「いつから・・・」

「お前がベッドから出たくらいだよ
気づいたら咲樹はスナ構えてるし、急にそれ持って外に行こうとする
何があった？」

そう聞く薫に咲樹をバックにしたTRGを組み立て薫に渡した

「その窓から煙をあげてるビル周辺を見てみる」

「・・・」

薫は黙って咲樹からそれを受け取り、窓からスコープを覗く

そしてその光景に薫は息を呑みながら咲樹の行動が何をしようとしたか理解した

咲樹にスナを渡すと薫はフーと一息つく

「お前はそのスナであのテロに介入しようとしたのか？
バカか、お前は？」

自衛隊でも日本警察でもない

ましてや、国籍はヨーロッパの軍人だ

もし日本やテロの国の軍事関係者にバレてみる
この世界だと一発で戦争関係だぜ？」

「だけどっ・・・!!」

咲樹はその先の言葉が出てこなかった

薫の言った言葉の意味を考えると何も言えなくなる

しかし、目の前で無抵抗な人間が撃たれているのを咲樹は我慢でき
なかった

すると急にある文を思い出した

「ロシアによる東京サンシャインホテル強襲テロ

そのテロに紛れて東京湾から潜水艦による爆撃と上陸により、日本の東京は混乱に陥り、同時に天皇陛下の人質により、ロシアは日本の高度な科学軍事技術の奪取に成功・・・で確かヨーロッパが苦戦することになるんじゃないかなかったか？」

咲樹のその説明はストーリーモードでのチャプター文章の言葉だった

「それは・・・」

「俺たち二人が今ここで食い止めれば日本が落ちない
ヨーロッパが苦戦しない

未来を知ってるからやれるんじゃないの？」

「・・・自ら人を殺すことになるんだぞ？
後悔はしないか？」

薫は最後の警告のように一層強く、低く問う

咲樹はそんな薫に怯えることなく答えた

「俺は『あの』母さんの子供じゃない

けど、違う咲樹の親でも父さんや母さんが暮らす東京が堕ちるのを
わかっていながら見逃すのは嫌だ

それに・・・苦戦することは全線に出る薫は危なくなるかもしれない・・・

薫を失いたくないから今やるんだ

文句あるかよ」

逆に睨み返してくる咲樹に薫は先ほどの表情から一変し、笑みを浮かべながら立ち上がる

「まったく、お前は昔っから頑固だからな
答えはわかってるさ

だが、戦力は俺たちだけ

危なくなつたらすぐに退くぞ」

「だな

薫は覚えてる？

『芋野郎はチキン野郎』その先は？」

咲樹の悪戯っぽい笑みを浮かべながらの問いに薫は、一瞬驚きの表情を浮かべる咲樹と同じような笑みで答える

「『攻めるが勝ち
倒してナンボ』」

「『逃げるなら爆弾大量設置
特攻クラン』」

「『B・RUCH』」

懐かしいセリフを言い終わるとコツンと拳をぶつけ合う

「これ言つたからには勝つぞ」

「ああ、上等！」

気合い十分の二人は最低限の荷物を持って部屋を出た

「裏口に5、正面7

周りは警察、自衛隊が囲ってる
どう攻める？」

偵察から帰ってきた薫はスコープを覗いてる咲樹にそう伝える

今現在、二人はサンシャインホテルから500m離れた中型ビルで
待機と作戦を練っていた

テロの影響により周囲は廃墟と化していた

「やっぱり裏口からの特攻じゃない？
自衛隊とかそっちは楽勝だと思うし、やっぱり警察とか正面に意識
が向いてるんじゃない？」

「だな、フラッシュ、スモークいくつ持って来てるんだ？」

「フラッシュ1、スモーク3かな、薫は？」

「フラッシュ3、スモーク2だ」

机の上に互いの手持ちを出し、装備の確認をする

「クレイモアは・・・二人合わせて4つか

まあ、畏はこんなもんでいいだろ

さて、どうしたものか」

薫は腕を組みながら考え込むが咲樹が窓を見ながら呟く

「ソッコー、特攻の方がいいんじゃないか？

ビル内に入ればこっちのもんだ

さっきテレビからの実況聞いてたけど、リーダー各は最上階の大型ホールでホテルの従業員や客を盾にして取り引きを要求してるらしいたぶん、ストーリー通りなら時間稼ぎなんだと思うなら、その時間稼ぎを使わせてもらおう」

冷静な落ち着いた口調でそう呟く咲樹に薫は驚きを隠せなかった

「どうした？

いつになく冷静だがどした？」

「いや、わかんない

けど凄く冷静でいられるんだ

緊張はしてるけど、なぜか物事をよく考えれる」

咲樹は表情は無表情だがその瞳は強い光が灯っており、それを感じた薫はアサルトライフルとサブの拳銃の安全装置を外し、荷物をまとめ始める

「なら、お前がその冷静さを掴んでいるうちに殴り込み行くぞ失敗はできない作戦だからな」

「ああ、必ず成功させる」

.

第十一発目（前書き）

所々、はしりました・・・
精神が持ちません
すいませんでした

とりあえず戦闘

薫のほうが活躍してるかな？

第十一発目

「3・2・・・」

『パス！プスス！パス！』

サイレンサーの音が二人にしか聞こえない程度しか出さず、正確に頭を捉え、静かに計五人の命を奪う

「先行する」

薫が静かに走りながら突撃し、その後ろで咲樹が周囲、後方警戒しながら薫についていく

ホテルに侵入し、一回ロビーが見える廊下の入り口で薫が手信号を送っていた

『敵を発見、数2』

咲樹はすばやく薫に近寄り、薫の指差す方向を見る

ロビーに続く少々長めの廊下

見ればロビーの方から開けるドアの後ろに二人が隠れながらロビーを見ていた

おそらくロビーで何かしら動きがあった場合の連絡係と言ったところだろう

「倒せるか？」

上に続く階段がちょうどこの廊下の真ん中だ
奴らがこつちを見たらそれでアウトだ

さすがにこの距離

ゲームじゃないんだ

俺には無理だ」

咲樹はチラリと目標を見る

その間、約30メートル

バレル前に倒す

「・・・最低でも5秒以内だな」

咲樹は手を胸に当てる

心臓は破裂しそうなほど高鳴り、極度の緊張を促す

一度大きく深呼吸する

「やるよ」

咲樹は一度立ち上がると一瞬だけスコープを覗きながら標的を確認

再びスコープを覗く

（せーの・・・）

右にしゃがみながら身体ごと廊下に出て引き金を引く
そして一人目の頭を撃ち抜く

（次っっ！）

反動を無理やり身体全体で受け止め、すぐに再び狙撃体制へ

見れば敵は味方が打たれたことに気づいたところだった

どこから？

ロビーから？

いつ襲撃に？

まさか後ろから？

そんなことを考え、後ろを振り向こうとする敵兵士

しかしその時点で『思考が止まっていた』

咲樹はすでに銃弾を敵の側頭部に打ち込んでいた

膝から倒れ、こちらを振り向くまえに思考を奪っていた

「ナイシヨツ、大丈夫か？」

「はは、スナの早打ちなんてするもんじゃないな」

乾いた声で笑みを浮かべる咲樹に薫はポンポンと頭を撫でてやると周囲を警戒しながら再び先行する

二人はその後、順調に階を進め、15階にたどり着いたところで歩みを止めた

「さて、ここが最上階だな」

「1階以外、敵に会わなかったのが不思議なくらいだったけど」

「そりゃ、表の警察がいまだに動きがないからだろう

屋上や地下から侵入しようにも必ず待ち伏せされている

それに咲樹みたいなスナイパー普通にいねえよ

咲樹がいるこそここまで来れたんだよ」

「つつ！／＼／＼／

あ、ありがとつ／＼／／／」

「はは、顔真つ赤

結構、可愛いぜ？」

「なっ！？うるさい／＼／

このオープンスケベ！

毎回、毎回犯す発言しやがって」

「なっ！？

それはお前が無防備だからだろ！」

「知るか！

エロ、スケベ、変態、童貞！」

「・・・テメエ、最後の言葉は聞き捨てならねえな」

「なんだよ、ほんとのことだろ！」

「咲樹も同じだろうが！」

いや、今は処女か」

「・・・帰ったら覚えとけよ、後悔させてやる」

「ハハハ、やれるもんならやってみる
でも・・・」

「ああ・・・こつちが先だな」

薫と咲樹は表情を変えてドアを見て、ガチャリとライフルのレバーを引く

「フラッシュ行くよ！」

「OK！」

ドアを開けカラン、カランと二つの音を立てながら室内に音が鳴る
感高い音と強烈な光が部屋中に広がり、中の人らは身動きがとれなくなる

部屋は大きなホールになっており、敵は計12人

人質の回りに5

窓側に2

ドアに1

部屋隅に4

こんな配置である

薫はドアの敵の頭部に容赦なくナイフで喉を食い込ませ、そのまま人質回りの敵に向かう

タンツ、タ、タ、タンツ、タンツ

とりズムよく撃ちわけながら相手の頭部を正確に撃ち抜いていく

咲樹は入った瞬間、敵を確認
焦らず行動

まず、部屋隅を撃ち抜く

部屋の隅はフラッシュから一番遠い
回復が早い敵から倒して行く

「薫！」

「ああ、来い！」

薫は人質の回りにホールのテーブルを倒し、即席のバリケードを作る

咲樹はそのバリケードの裏に飛び込み、リロード

そして次の瞬間、バリケードに弾丸の雨が降り注ぐ

「薫、援護！」

咲樹の言葉に薫は敵の方向にバリケードから銃だけを出し、乱射する
咲樹はバリケードの小さな隙間から銃口を出し、スコープをすぐに
覗けるように狙撃体勢に

薫の乱射が終わり、敵の一人が物陰から頭を出した瞬間

咲樹はスコープを覗いて微調整

敵が身体を出して、銃を構えた時にはすでに引き金を引いていた

何の音もせずに、敵は吹き飛ばされ、胸を抑えながら命が途絶えた

「おい！？

発砲音しなかったぞ！

クソが！」

味方が何の音もせずに殺られたことに動揺し、思わず声を上げ、死
体を見る

しかしその動作が命取りになった

ザシュ！

ほんの数秒で敵の目の前に迫った薫が敵の喉元に長いグルガナイフ
の刃を刺し、瞬時に抜かれると頭をハンドガンで撃ち抜かれる

男は死んだことに気づく暇なく息絶える

「咲樹！人質の縄をほどいたらさっさと退くぞ！
下の掃除をしてくる！」

「ああ！」

わかった、すぐに行く！」

咲樹は階段を降りて行く薫に返事を返すと人質の中の代表っぽい人の縄を切って行く

「あなたがここのホテルの支配人ですか？」

「はい、助けていただきほんとうにありがとうございます！」

「礼はいいです」

あなたはこれから何かしら外に連絡を取り、救助を待つて下さい
あと、救助は必ず30分後でお願いします

今から他のテロリストを掃除します

それはその時間です

いいですね、30分後です」

「えっ！？

ええ、わかりました！」

咲樹はその返事を聞くなり、すぐにドアに向かっていく！

銃声の音を頼りに階段を降りていく

すると下から多くの足音が聞こえた

隙間から覗けば銃を構えて走って登ってるテロリスト達だった

おそらく騒ぎに気づいたのだろう

咲樹は階段の隙間から見えるテロリストに狙いをつけ、引き金を引く

上から首筋を撃ち抜き、倒れたテロリスト

それに気づいた仲間が銃を階段の隙間から乱射してくる

だが咲樹は身を引かず隙間から再び狙いを定める

頬と手を銃弾が掠めるが我慢

そして乱射してる銃を持つ手を撃ち抜く

悲鳴を上げながらアサルトライフルを落としたのを確認すると咲樹は薫がいると予想した買い階のドアをあける

「っ!？」

咲樹！伏せる！」

薫の叫び声にすぐに膝を曲げ、腰を落とす、後ろを見る

それと同時にAK-47の高い銃声が響き、二人のテロリストが崩れ倒れる

それと同時に咲樹は携帯型のバックからクレイモア（簡易型地雷）を階段のドア付近に設置する

そしてしばらくして勢いよくドアが開く

それと同時に電子音が響き、クレイモアが起動する

「グレネード！」

クレイモアに掛かり、最初のテロリストが吹き飛び、後列のテロリ

スト達が体制を崩したところにグレネード爆弾をブチ込む

クレイモアより一層勢いのある爆発音が響き、ドアから血が勢いよく飛んでくる

「先行する」

薫は僅かに砂煙が上がっている階段に走り、銃を構える

「・・・今、楽にしてやる」

呟きとともに銃を乱射

グレネードの空爆により即死じゃなかったテロリストはその銃弾により、息絶える

「ずいぶん固まってたんだな・・・」

「一気に俺たちが居た階に雪崩れ込むつもりだったんだろ」

階段は酷い惨状だった

階段は粉々に砕け、床、天井、壁は肉片や血糊、内臓や骨片が飛び散っていた

上半身だけが残ってる死体や顔が潰れてる死体もある

「・・・反対側の階段にも敵がいるだろう」

「ああ、そつちも片付けないな」

まずはすでに敵が階に侵入してないか確認

「クリア・・・」

咲樹の言葉を聞いた薫は慎重にドアに向かう

クレイモアはまだ作動していない

銃口を出しながらそつとドアを開ける

『ガチャ』

銃のレバーを引く特徴的な音

そしてここ数ヶ月で身に付いた戦場の勘とゲームの時にトップクラ
スまで登り詰めた経験が心の中で警告音を鳴らせる

そしてすぐに出そうとしていた身体を引き戻す

『ダダダダッ!』

開けたドアが銃弾により蜂の巣になる

「あつぶね・・・」

咲樹、フラッシュを使うから俺が出たら上の階段に行って狙撃でき
る奴を倒してくれ」

「わかった

気を付けるよ?」

「ああ、わかってる」

そう言つて薫は歯でピンを抜き、2秒だけフラッシュを持つ

基本的にグレネードやフラッシュ、コンカッションは3秒や2秒後に爆発するようになってる

そして薫は3秒目にフラッシュを階段に軽く放り投げる

動物は目の前・・・視界の前方に急に出た物に必ず目線が動いてしまふようになってる

薫はその見た瞬間にフラッシュが爆発するように投げたのだ

フラッシュを避けさせる暇を与えぬようにだ

強烈な閃光が止んだのと同時に薫は階段に走り込む

しかし最前列の敵はフラッシュを食らいながらも銃を乱射していた

胸に銃弾が当たるが最前列の歩兵が身につける防弾チョッキだ
衝撃だけで済む

腕を貫通するが利き手じゃないから問題なし

「うおおー！」

AKを連射しながら次々と敵を倒していく

しかし、フラッシュから回復した敵が応戦

左右にステップしながら敵の標準をずらし、銃弾を避けながらも反撃

「グハッ！」

「なんっ！？」

素早く二人の敵が薫の視界から崩れ落ちる

「ナイスショット、咲樹！」

心強い援護に薫は敵を蹴散らす

カチツと弾が切れた合図になる

しかし相手とは戦闘中

薫はAKからM4A1に切り替える

破壊力は落ちるものの高い命中率で頭部や首を撃ち抜いていく

防弾チョッキや足や手には多くの銃弾の傷痕があるが残り三人

薫は止まらなかった

M4の弾が切れたところで小型の携帯型トマホークを投げつける

深々と刺さった胸にささった一人

残り二人にナイフを持って迫る

しかし敵は距離を取る

だがしかし・・・

「逃げるなよ、チキン野郎」

咲樹が呟くのと同時に一人が吹き飛び、間をおいて頭を撃ち抜かれた敵がバタリと絶命する

約10人ほど・・・

最上階とクレイモアのをあわせて30人弱

負傷を負いながらも咲樹と薫は生き抜いた

「悪い、肩かしてくれ

もうボロボロだ」

「はは、お疲れ様」

咲樹は笑顔で薫の腕を肩に回すとゆっくり階段を降りていく

その後、一応周囲を警戒しながらも二人はホテルを脱出

咲樹は自分たちの傷口を軽く止血をするとそのままタクシーを捕まえ部屋をとっているホテルに向かう

「おい、薫

寝るな！重い！」

タクシーの中で咲樹に持たれながら寝る薫

咲樹の苦勞は知らずに規則正しい寝息を立てる相棒に咲樹は諦め、

膝を貸してやる

（良い匂いだな、咲樹）

薫に意識があるとは知らずに

.

第二二発目（前書き）

やっと更新・・・

今回は咲樹主点です

第一二発目

「任務ご苦労

そして報告なしの戦闘介入行動をしつかり説明してもらおか
アレン大尉にサキ中尉」

「薫、任せた」

「逃がすか、お前も道連れだ」

日本から帰国した二人が待っていたのは、
頭に？マークつけたニコニコライデン隊長に連れられるという仕
打ちだった

あのテロ事件から一週間後

日本自衛隊は警戒体制を取るようになりアジア連盟はアジア国に対
して臨戦体制を・・・

今まで緊張状態だった四つの勢力がついに動いた

それによりユーラシア連邦のドイツ軍に並ぶ戦力であるユーラシア
合衆国軍も慌ただしく動いていた

ライデン隊長の執務室にて

「今回、お前達二人が戦闘介入したのはロシア人のテロ行為だった
そこでわかったことだがその二日後に海上からの戦闘があった
潜水艦や大型駆逐艦などの大規模な戦闘だ

結果はやはり強固な防衛力のある日本の勝利だったが日本は大分、
戦力を消費しただろう

そしてこのような大規模戦闘はさらに起きる

今から五時間、ドイツ軍はロシア国境沿いに進撃を始める
ドイツ軍を中心に、イギリス、フランスも続くようだ

そして俺たちにも任務だ

戦い気溢れるお前ら二人には悪いが俺たち特殊部隊は前線ではなく
極秘任務が与えられている

今から二時間後にミーティングで説明するが、簡単に言えば『暗殺
だ』

”暗殺”・・・

それはこの世界に来て、初めて体験する任務であった

北朝鮮のとある海岸にて

「こちらです！急いで！」

北朝鮮人の身分の低い人間は社会国家なため毎日が生き残りの戦いだった

それを知っているユーラシア連邦は北朝鮮人の身分の低い人間を極秘理に身分の保証と共に買収し、工作員として仕立てた

今回の作戦のために

作戦内容は街のある高級レストランにて北朝鮮の外務省とロシア人の外務省の食事会がある

そしてターゲットはロシアの外務省

シュベン＝マルファーン

彼はロシア軍が補給してる武器商人との取引をしており、彼を抑えればしばらくは武器商人とのやり取りはなくなり、ドイツ軍の進撃状況にも彼の暗殺の成功失敗は大きく関わるだろうと……

海上の北朝鮮軍の目を掻い潜り上陸した特殊部隊は工作員が用意した車に乗り、繁華街に出る

時間帯や工作員の手によってターゲットの店付近は人通りはかなり減っていた

ライデンは素早く指示を飛ばす

「四五にて突入する

各員所定の位置に行け

狙撃部隊は反対側ホテルから援護を・・・

いいな、サキ中尉だけは守れ

そしてサキ中尉

お前の腕に期待している」

「了解・・・」

サキは冷や汗をかきながら心臓は破裂しそうなほど緊張していた

そんな咲樹に薫はなんとか緊張を取ろうと声をかける

「まあ、あれだ

今回の任務、爆破ミッションであつたチャイナタウンの地形とかなり似てるんだ

そうガチガチになるなつて」

「俺、仕留めれるかな・・・」

「なら、ずっとスコープ覗いとけて

俺たちがそっちに誘導するからさ」

「・・・Dイーグルだ

お前のハンドガン、ベレッタだろ

弾数はこっちのほうが少ないが威力はかなり高い
貸してやるから必ず生き残れよ」

大切な人を失う怖さ

それを咲樹も薫も互いにわかってる

だから咲樹の心配は薫もわかっていた

「おう、サンキュ」

そう言つて薫は背を向けて行く姿に咲樹は生きて帰ってくることを
祈るしかなかった

突撃予定時間まであとわずか

咲樹は愛銃の安全装置を外し、目標のビルの屋上にいた

しばらく経つと無線から突入の合図が送られる

咲樹はあらかじめそのビルの屋上にいることでヘリを使って逃げる
ところを狙撃

本来ならば普通、もっと離れた位置から狙撃するはずなのだが成功

率を高めるため、目標のビルなのだ

そしてビルの下から爆発音が響く

本格的に突入が始まった

無線に集中しながらスコープを構える

まだか、まだかと待つ時間は長く感じるほどだった

（外さない・・・

絶対に外さない

ボディーガードやら何かいても外さない

確実に”殺す”）

・・・タタタッ

複数の足音が屋上へ続く足音が響く

屋上にある鉄骨などの物影からスツと銃口を出す

咲樹自体荷物に隠れており、時間は夜

咲樹の姿はほぼ見えない状態だった

そして三人ほどのボディーガードと共に出てきたのは二人の男性だった

スコープの標準は銀髪の男性の頭部に合わせる

胴や胸は防弾チョッキなどされてる可能性があるためだ

へりを待っているのかターゲットの足が止まり、ボディーガードの注意も階段に向いている

咲樹は大きく息を吸うと少し吐き、息を止める

引き金を引き、屋上には大きな轟音が響いた

（ターゲット、暗殺完了
北朝鮮側も殺る）

咲樹の狙撃により脳内の物をぶちまけながら確実に死んだ死体を確認後、そのまま面倒なボディーガードを殺していく

（周りを確認するのはいいが狙撃手相手に止まるのは自殺行為だぜ
？）

難なく頭を撃ち抜く

だが、さすがにここまで来ると銃口から出る発砲の光で位置がバレてしまい相手からこちらに銃撃が始まる

咲樹は鉄骨を盾にして応戦する

（ゲームじゃ簡単に見えたけど・・・反動やら何やらで頭出して打てねえ！）

咲樹はなんとか横から狙撃で応戦する

「ガアッ！・・・いてえ」

利き腕の二の腕を弾が貫通した

狙撃銃をその場に置き、予備の武器を出す

コルト・アナコンダ

デザートイーグル並みに破壊力があるリボルバー式のハンドガンである

しかし、利き腕じゃないため当たるわけではなく防戦一方・・・

だが、そんな時屋上に自分を呼ぶ声が響いた

「咲樹！」

「薰、ここだ！」

咲樹は鉄骨から大声をあげながらアナコンダを連射する

敵側はあいての増援に形成が逆転し、戸惑いを見せた

が、形成は再び一気に逆転した

『バラバララッ』

上空から敵側の武装ヘリがこちらに向かって来ていたのだ

「総員、隠れろ!!」

ライデンの指示に咲樹は身を低くし、薫達、突撃組は慌てて屋上入り口から中に入る

その瞬間、ヘリのガトリング砲が火を吹き、敵側の鉄壁となった

「クソッ、薫達が・・・」

ガトリング砲は屋上側を集中狙い、敵ボディーガードはこちらを狙っている

その間にターゲットは着陸したヘリに乗り込もうとしていた

「狙うしかないか・・・」

咲樹は左手でTRGを拾うと鉄骨を支えにしながらスコープを覗く

もちろん、銃弾の嵐の中だ

（下手に苦しませない・・・即死だ
一発で楽にさせてやる）

咲樹は必死にスコープの標準を合わせる

「イツテエ!!」

頬を弾を擦るがスコープを覗く

サブマシンガンをぶっ放すボディーガードは無視

ガトリング砲を打ち続ける敵兵士の側頭部を標準を合わせ、引き金を引く

『ドオウーン!』

うるさい銃弾の嵐の中さらに大きな音が一発の弾丸により静寂が引き寄せられた

その一発によりガトリング砲の壁は突破され、すぐさまライデン達が雪崩混む

敵側は慌ててへりに乗り込み、ボディーガードがガトリング砲を打とうとしたが・・・

「させるか!」

薫はAK200を連射する

毎分600発できるAKシリーズの攻撃力は世界でも有名である

ボディーガードの男達は防弾チョッキに包まれていない頭や手足を撃ち抜かれる

しかし、同時にへりの離陸が始まった

「逃がすな!」

パイロットのいるコックピットを狙うが防弾済みのコックピットに

銃弾が届くことはない

咲樹も機関部を狙うがヘリによる風により、狙いが定まらない
惜しくも北朝鮮側の外務省の暗殺は成功できなかった

「咲樹！大丈夫か！？」

撤退すべきため咲樹の回収に薫は向かう

「ハハ・・・右腕が使い物にならねえ
武器持つてくれないか？」

「お前が無理しやがって・・・」

薫はTRGとAKを肩で背負うと咲樹をお姫様抱っこする

「隊長、咲樹が怪我をしたんで俺が運びます！
脱出の際、援護お願いします」

「わかった、総員迅速に脱出しろ！
急げ、この国の犯罪者になるぞ！」

そして薫達は北朝鮮のミッションを終わらせたのであった

第十三発目（前書き）

あれ？・・・咲樹が暴走しなかった

つか、半チート？武器を出してしまった

第十三発目

北朝鮮から脱出後、咲樹達は船やヘリを使い、追っ手をやっと振り切ったのがインド付近だった

ヘリからユーラシア連邦の母艦に着陸した今、インドの軍港で補給整備をするため停泊している

そして現在、咲樹と薫はライデンと共に街にいた

「ライデン隊長

こんな街に何かあるんですか？」

「実はここに知り合いの武器商人がいてな

ちよいと見ていくついでにお前達を連れて来たんだ

カスタムとか金がかかるかもしれないがしてくれるからなだからお前らに武器を持たせたんだ」

「「カスタム!？」」

ライデンの言葉に二人は目を輝かせた

自分なりに武器を改造できるのだ

内心でどうカスタムしてもらうか悩み始めた

市場の脇道を抜け、住宅街に入り、水路が見えると橋にいる占い師に出会った

「すまないが占って欲しいものがあるんだが」

「何をだね？」

（（??））

いきなり占いを始めたライデンに二人は首を傾げる

「俺と鉛との出会いをだ」

ライデンがそう答えると占い師は目を見開き、驚いたがすぐに笑みを浮かべた

「後ろの建物の地下だ
階段は建物内の右壁隅」

「ありがとう」

そうライデンは礼を言つと建物に入り、二人も慌ててついていく

「ライデン隊長今のは・・・」

「まあ、あれだ
限られた客しか扱わない店でな
そのためのパスみたいなもんだ

さあ、着いたぞ」

ライデンが建物の言われた壁を押すと中は壁掛けの明かりによって照らされていた

そして壁には数多くの銃が並べられていた

「スゲエ・・・」

「なんて数だ・・・」

咲樹と薫は圧巻されていた

「久しぶりの軍人客だと思ったらお前だったか、ライデン」

「たまたまこの港に寄ったからな
今日は頼りになる部下が客だ、ジーン」

ライデンと親しげに会話してる眼鏡を掛け、インドでは珍しい金髪白人の男性はジーンというらしい

「アレン・フォーマット大尉です」

「サキ・ミーシリア中尉です」

二人は敬礼をし、挨拶をする

そんな二人にジーンは笑みを浮かべた

「ハハ、いい挨拶だ

さて、先ほどの反応を見るからにカスタムしたいのдар？
銃を見せてくれないかい？」

そう言われ、薫はボストンバックからAK47とAK200を取り出す

咲樹は長めの布袋からTRG21を出した

「ほお、二人とも破壊力のある銃を使ってるねえ

どんなカスタム希望だい？」

「私はサプレッサーとサーマルスコープを買えばいいです

あとL96A1ありますか？

一応、予備のSRとして買っておきたいんですが・・・」

「その銃ならそっちに立て掛けてあるよ

見てきたらどうだい？

さて、アレン大尉はどうする？」

ジーンは咲樹にそう言うなり薫からAKを受け取りながら聞き出す

「俺はAK47がメインだからコイツにレッドドットサイトに銃剣、200にはグレネードランチャーとサプレッサーをつけてくれ

あとはM4A2あるか？

あつたらそれにもサプレッサーとグレネードランチャーをACOGつけてくれ」

「ずいぶんカスタムするね

ACOGつけるってことは狙撃用かい」

「アサルトで狙撃用？」

咲樹は二人の口から出た『ACOG』という言葉から狙撃ということに疑問を感じた

「ああ、遠距離をアイアンサイトで撃つのはさすがに自信ないからだからACOGなんだよ」

「SR使えばいいじゃない・・・」

「前線でそんなボルトアクションのSR扱えねえよ

それができるのはお前みたいな狙撃手だけだ

ショットガンの要領で撃つスナイパーなんて普通いないぞ？」

「俺もできないな」

咲樹の当然のような呟いた言葉を薰はため息まじりに否定し、ライデンは当然のように同意した

しかし、初耳の人には笑いのネタになったのだろう

「アハハ、ライデン

その話は本当かい！？

前線でSRを使うなんて信じられないよ！」

いまだに笑うジーンに咲樹はちよつと不機嫌になり、言い返す

「スナイパーライフルは遠距離を撃つても威力が落ちないように作られてるのでしょうか？」

「なら近距離で当てられたその弾丸は絶大だと思いますよ?」

「だけど標準を合わせるのは並大抵ではないだろう?」

そう言われた咲樹はこの身体に最初からなっていないのでゲーム感覚できてましたとは言えずに・・・

「銃口の向きと多少の調整でできました

近距離なら風や湿度の影響はそこまで考えなくていいので」

と答える

それを聞いたジーンは・・・

「ライデンが嘘をつくとは思えないし・・・

ライデン、こんな逸材隠してるなよ」

咲樹の正直な瞳を見たジーンは納得したかのように頷くとバシバシとライデンの肩を叩く

「すまん、このコンビはハッキリ言っただ俺の部隊の主力だ
実力だけなら俺以上だ」

「そうなのか・・・」

ライデンの苦笑混じりの答えにジーンは考え込む

その表情は真剣そのものだ

「ライデン、頼みがある

その二人の実力が本物だと信じよう
昔からお前のコンビだったからな

そこで頼みがある

報酬は今回のカスタム代をチャラとプレデターを用意する」

「「プレデター！？」」

咲樹と薫は驚愕の表情を浮かべた

RQ-1プレデター

戦場をひっくり返す対地上用兵器だからだ

しかし、その兵器は無人機型ミサイル航空機であり、航空機パイロットとミサイル制御の遠距離による操縦なため、誤射や命中しにくい事が多い

だが、威力は申し分ないのだ

咲樹や薫もオンラインゲームをやった際に出てきた兵器だった

「・・・どんな任務だ？」

そんな兵器を用意するなんて重要な依頼だろうか？
危険度はかなり高いはずだ」

ライデンの声は低く冷徹な軍人な表情であった

戦略兵器が出てくるほどだ

ジーンも冷や汗をかきながらカウンターにあるパソコンのキーボードを叩く

「これを見てくれ

情報仲間がロシアのコンピューターにハッキングした情報だ

場所はアラスカだが、こんな戦時中だ
たぶんロシア軍に侵略されたんだろう
そこの奴が教えてくれたんだが……

この潜水艦なんだけど
ボレイ型原子力潜水艦

ミサイル巡洋型潜水艦だから武装は攻撃型なんだ
そしてこの潜水艦には「核弾頭か」

ジーンの言葉をライデンの重い一言で遮る
ジーンはコクリと頷くと少し間を置いてから説明を再開した

「このミサイル目標はドイツ国境とワシントン
しかも厄介なのはステルス性弾頭ミサイルなんだ

だから今回はこの潜水艦の破壊とできたらデータを盗ってきてほしい」

重苦しい雰囲気か4人を包み込む

だが、その沈黙をライデンが破った

「上層部に報告した上で決める
通信コードはなんだ？」

「9443 AG5

頼む、ドイツを救ってくれ……」

「善処するさ、相棒

じゃあ、また連絡するぞ
そいつの銃はその紙に書いてあるところに送つといってくれ
行くぞ、アレン、サキ」

そう言つて出ていくライデンに続く薫
だが、咲樹は出ていく際にあるものを見つけた

「この銃……
ジーンさん、これTRGですね！
買つていいですか！？」

そう言つて咲樹が掲げたのは赤い塗装にマガジンがなぜかお椀のよ
うに丸くなつたTRG-21だ
だが、ジーンは驚愕の表情だつた

「なつ、なんで持てるんだ！？」

「えっ？

普通に持てましたよ？
なんかあつたんですか？」

咲樹は普通じゃないジーンの反応に首を傾げる

「その銃はいつの間にか普通に置いてあったんだ
どかそうにもとてつもなく重い上に銃やバーナーでも壊れない呪わ
れたような武器だ」

「ええっ！？……」

普通に持てたんですけど……」

「なら金はいらないから持ってたてくれ！

ああ、あとコイツも持ってたててくれないか！
そのTRGと一緒になんだ！」

ジーンがカウンター裏を指差す

咲樹はカウンター裏に回るなりその銃を見ると驚き、思わず渴いた
笑い声が出た

「ハハッ、こりゃ嘘じゃないみたいだな」

そこには銀色の塗装に竜の柄があり、少々長めのマガジンに銃剣が
ついたAK-47があつた

難なく持ち上げた咲樹は嬉しそうに笑顔を浮かべた

「ありがとうございます！」

咲樹は礼を言うなり、薫を追いかける

「薫、薫

これ何だと思う？」

追い付いた咲樹は悪戯っ子のような笑みで先ほどのAKを見せる

「なんだよっーーーーって、これAKインフィーか!？」

「うん、俺もTRGインフィー見つけた」

インフィー・・・これはゲームの時のイベント兼課金武器であり、
予備マガジン無限の武器である

「まさか課金武器があるとはな・・・」

「ああ、俺も驚いたよ

だけどこれは助かる

弾の心配がなくなるからな
艦に戻ったら試し撃ちしてみるか」

(っ! / / / /)

薫は咲樹の妖艶な笑みについドキリとしてしまった
女性になってからその笑みは男性の薫には刺激的であった
気を紛らそうと薫は咲樹の頭を撫でた

「ったく / / /

ナイスだよ、咲樹」

「うわっ!？」

やめろって!／／／／

撫でられることに恥ずかしいのか咲樹は赤面しながら暴れる

そんな二人を見たライデンはつい微笑んだ

（さっきまでの暗い雰囲気だったんだが、すぐに明るくしておって
まあ、あの二人だからこそなんだろうな）

「おい、いつまでもイチャイチャしてないで艦に戻るぞ!」

「なっ!？／／／／」

「イチャついてません!／／／／」

慌てて身を離して言うが真っ赤にした顔では説得力には欠けている

「わかったから行くぞ!」

じゃないと置いてくからな!」

「「はい!」」

駆け寄ってくる二人に背を向け、ライデンは空を眺めた

（あの二人に任せて見るかな・・・）

今もどこかは戦場になっている

しかしこの戦場じゃない場所の空を明るく澄んでいた

.

第十四発目（前書き）

急展開と言われましても、作者は文才がないものでして・・・

ああ、サドンアタックも最近できないし・・・

サドンアタックやってる人います？

Tales of thra b y s

って名前です、見つけたら一声お願いしますm（――）m

第十四発目

艦に戻った薫と咲樹は早速艦内の射撃訓練場で試し撃ちをしていた
立ち撃ち、しゃがみ撃ち、三脚を使う固定撃ちなど計五発撃ちり口
ードするためマガジンを引き抜く

そこには咲樹の予想通り『なぜか』弾が消費されていないマガジン
だった

撃てるか試すため再び五発撃つ

弾には問題なし

しかし、上限は五発までだった

だが、これは完全な無限マガジンのついたTRGだった

「マジかよ……」

予想はしたが改めて反則だと思った

上限は五発だがマガジンの取り替えは引いて、すぐに再び入れるだけ
マガジンの取り回しの時間の短縮や予備マガジンの重さの軽減、弾
数の心配解消など十分な反則物だ

「咲樹、確認終わったか？」

「ああ、終わったよ
どうだった、AKインファイ？」

咲樹の質問に薫は満足そうに笑顔を浮かべた

「最高だぜ、ゲームの時はさほど感じなかったけど弾無限って最高だ弾の心配もしなくていい
リロードも早く終わる

しかも銃剣の切れ味も問題ない
咲樹も同じだろ？」

「うん、薫と同じだったよ
これなら予備にカスタムTRGかL96A1を状況に応じて持って
行けばだいぶ戦いやすいよ」

「ホントお手柄だ、咲樹」

薫に誉められ、咲樹は恥ずかしく感じながらも役にたったことを嬉しく感じた

すると射撃訓練場のドアが開かれた
今は咲樹と薫しかない
つまり、新しく入ってきたようだ

人数は二人

しかし、入ってきた連中の顔は見覚えがなく、軍服も咲樹達と違い
海軍の物だった

「おいおい、先客がいると思ったら女連れかよ」

いかにも柄の悪そうな金髪の男はこちらを・・・薫を睨み付ける

「なあ、彼女」

そんな男じゃなくて俺たちと一緒にやらないかい？
楽しくやろうぜ？」

もう一人のスキンヘッドの男は笑みを浮かべながら咲樹に手招きするがその視線に咲樹は悪寒を感じ、身を引く

「誰があなた達みたいなの下心丸見えな人とやるもんですか
アレンといたほうがずっと楽しいわ」

一応、冷静なのだろう

他人の前ではしっかり女らしい振る舞いをしている

（咲樹もこう女性らしい言い方とか振る舞いすれば可愛いんだよね
てか、あの二人に油注いでるよな・・・あちらさん明らかに俺に敵意向けてるよな）

薫は苦笑しながら小さくため息をつく

「それにあなた達みたいなのとやったら射撃の腕が落ちそうです
アレン以外に教わるなら一人でやったほうがいいです

だからあなた達みたいな雑兵に興味ありません」

ブチッ！

目の前の海兵の状態を現すならそれが正しいのだろう
薫は今度は明らかなため息をつく

「おい、テメエ

そこまで言うなら勝負しやがれ

時間は10分2セットで倒した総数で勝負だ

あと、女

負けたらお前は俺のもんだ」

「別に構わないわ

そっちも二人いるんだし、2ー2でやりましょうよ

確実に潰してあげるわ」

「上等だ！

必ずお前を泣かして、夜はいい声で喘がせてやるぜ！」

連中はそう言うなり先に射撃場に入る

それを見た薫は盛大にため息をつく

「なあ、お前はなぜそう厄介な方に持つていく？」

「だって薫を馬鹿にされたみたいで嫌だったから・・・」

「だからってな」

負けたらお前どうなるかわかってるのかよ！」

「それはそうだけど・・・」

薫の言葉に咲樹は言葉を詰まらせるがそれでも薫に真正面から強く言う

「薫を信じてるから」

（ッ！！／／／／）

咲樹はそれを言うなりさっさと銃の確認など射撃準備をした

（あんな言葉・・・反則すぎる／／／／

そんな言われたら尚更負けられねえじゃん・・・）

薫はニヤけそうな口を抑えながら内心を落ち着かせようとした

するとそこで、ブブーというブザーがなる

連中の射撃が終わったようだ

「薫、俺たちのコンビネーション見せつけてやろっぜ！」

明るい笑顔で言う咲樹の表情に薫はフツと深く息を吐き、心を落ち着かせる

（そうだな、ゲーム時代5年からの相棒だもんな）

「ああ、そうだな」

薫はAK-47インフィーを持ち、射撃訓練場に入る

今から二人のやる射撃訓練場は横4メートル縦15メートルの射撃場であり、5分で1セットのそれが2つ

ターゲットは自動ランダムで出現し、障害物も少しは置いてある

全部でターゲットは5以内に30は出てくる設定である

そして先ほどの連中は20 - 18

つまり、計60中38、6割は倒しているという好成績

二人はそれをさらに上回る必要があるのだ

薫は左側に立ち、AKを

咲樹は右側に立ち、TRGを

そんな二人に連中は笑い声を挙げた

「おいおい、ボルトアクションのSRで大丈夫かよ！

こりゃ、勝てたな！

ギャハハハ！」

盛大な笑い声の中、ブザーがなり、すぐにターゲットが出現する

右側と真ん中木箱裏と左側に1体ずつ

パン！ドンッ、ドンッ！

と3発分の銃声が鳴る

薫は1発でターゲットの頭を撃ち抜き、咲樹は真ん中と右側のターゲットの胸辺りを撃ち抜いていた

その速さに連中は笑い声が止まった

だが、二人の速さはそれで止まらなかった

薫は左側を咲樹は右側を真ん中は互いにターゲットを撃ち落としていた

「リロード！」

咲樹の声に薫は真ん中に移動し、多少撃ちこぼしながらもターゲットを落としていく

そして咲樹のリロードが終わるなり交代し、薫がリロード
咲樹はハンドガンでターゲットを撃っていく

それを繰り返して行き、結果は・・・

前半が25で後半が23
合計が48で圧勝であった

「私達の圧勝ね
相手の力量見てから喧嘩仕掛けなさいよ
行きましょ、アレン」

咲樹はそう切り捨てるなり出入口から訓練場を出ていき、薫も着いていく

「あゝ、スッキリした」

「お前、容赦なくやったな」

薫は咲樹の満面の笑みに一息つく

昔から咲樹はああいった天狗伸ばしている輩を見つけては完膚なきまで潰していたのを思いだしてしまったのだ

「だがあんな危険な賭けに次から乗るなよ？

負けてたらどうするつもりだ？」

「負けてないじゃん

てか、負けること考えてなかった」

咲樹は自室に着くなり武器を置いて備え付けのベッドに座る

「考えろつつつの

心配するこっちの身にもなれつつつの」

薫も武器を置き、簡易冷蔵庫からコーラの缶を出し、飲みながら答える

「ゴメン・・・」

「ったく、もうこの話は終わりだ！」

しんみりしそうな雰囲気は薫は一言で断ち切る

薫は話題を変えようと考える

するとあることを思い出した

「咲樹、そっぴやこの世界って俺たちがいた世界と変わらない世界だったよな？」

「うん、それがどうした？」

笑顔を浮かべながら話す薫に咲樹はわけがわからなく首を傾げた

「この世界にも『第三次世界大戦』あるかもしれないだろ？」

「ああ、そうか！？
じゃあ・・・」

「帰ったら早速パソコン買ってやってみようぜ！」

咲樹はベッドに寝転がりながら顔を緩ませる

きつと楽しみなのだろう

そんな咲樹を見ながらも楽しみにしてる自分に薫はテンションが上がる

「そうそう、忘れるところだった

咲樹はさっき俺にかなり心配させたんだ」

その言葉にビクリと身体を震わせる

「アハハ、さっきまで忘れようとしてませんでしたか？」

苦笑しながら咲樹は近づいてくる薫から離れようとするが金縛りのように足は動かない

そのまま薫は仰向けの咲樹にのし掛かる

「えっと、何する気？」

一応、聞いてみる

「何って、オシオキ

ついでに女になった咲樹を弄るのは初めてだからな
いろいろ試すぞ？」

「えっ？／＼／＼」

咲樹はドキリと胸が高鳴るが同時に混乱になる

（なんでこんなにドキドキすんだよ！？

薫のお仕置きだぞ！

つか、コイツまさか！？）

咲樹は逃げようとするが胴体はガッチリ薫の両足で挟まれてホールドしている

「逃がさないぞ？」

今まで散々我慢したんだ

ちよいと発散させてもらっぞ?。」

「いっやああああっ!。」

――――

女性軍人が数少ないむさ苦しい戦艦の一室は羨ましい女性の声がしたとき

作者「何だい?ナニはしてないよ?

まあ、セクハラ紛い行為は知らんけど、そこは皆様のご想像におまかせします

ちなみに作者は女友達を気持ちよく鳴かせたたら

『お前、絶対Sだろ!』

と言われてしまいました
弄るのは楽しいのに

(、・・・、)

さて、次回は久々にメアリー出します!

第十五発目（前書き）

急展開すぎる？

文句は聞く

だが直さん！

だって早くラブ見たいもん
作者はラブコメ大好きッス

咲樹君がサキちゃんになりました

あつ、あと後書きにて
テキストなお知らせあるよ

第十五発目

北朝鮮から帰国して二日目

「ふあゝ、飯」

加藤咲樹こと

元男のサキ・ミーシリアはベッドから起きるとシャワー室に行き、身嗜みを整える

髪の手入れや軽い化粧を終え、白いワイシャツの上に茶色のジャケット、ジーパン、黒のロングブーツという簡単な服装にし、長い綺麗な金髪は一つに束ね、ポニーテールにする

最後に護身用にジャケット内ポケットにコルト社のアナコンダ二挺とサイレンサー用のサプレッサー

予備マガジン二丁

背中にバリステックナイフを装備

「薫はまだか・・・」

幼なじみに相棒であり、共にこの世界に来た親友の

山崎薫・・・の人格を持つ

アレン・フォーマットを起こさないように咲樹は扉を閉めた

――――

「あつ、お待たせ」

「うん、大丈夫よ
そんなに待ってないから」

咲樹はロビーで待っていたメアリーと合流する

メアリーは白の斑点模様のワンピースに薄灰色ガーディガン、肩ま
である茶髪はカールが掛かっている

咲樹は素直に可愛いと思った

「メアリー、その服装似合ってるわよ」

「ありがと、サキ
けどサキはいつもワンピースとかミニスカートとか着てるのに今日
はずいぶん変わった服装なのね」

そう言われた咲樹は内心でギクリとなる

（まあ、あつたよ
たくさんありましたよ！

けど、なんというか抵抗感がありましてね

今日は勘弁してください)

「アハハ、今日はちょっと雰囲気変えて見たのだけれど変じゃない？」

咲樹はなんとか誤魔化そうとした

「うん、変じゃないよ
それにカッコいいわ！」

「そ、そう？よかったわ」

(なんとかなった…)

咲樹は小さく息を吐く

過去の経験からメアリーはダメだしたらうつるさくなくなるとわかって
いたためである

「それじゃ、行きましょ
今日は1日遊び尽くすんだから！」

「うん、行く」

二人はいい天気な空の元、基地から街中に向かった

「いっぱい買い物したわね」

「ええ、普段お金貯めてた甲斐があつたわ」

（おかげで服が増えたけどな・・・）

二人は今、街中の噴水がある広場に構えるレストランに来ている
咲樹はフルーツヨーグルトパフェ

メアリーはレアチーズケーキとモンブラン

甘い物は別腹です

これは女性特有の名言らしい

現に咲樹も女性になってからというものの甘い物は好きになった

そんなこんなで甘い物を堪能している二人

そしてやはり、会話は甘い話になった

「ねえ、ねえサキ

そろそろ幼なじみの子の顔みただけれど進展ないの？」

「なっああ！？／＼／＼」

パフェを食べてる最中だったら吹き出してただろう・・・それくらいまで驚かされ、完熟トマトのように顔を赤くされてしまった咲樹

「なっ、何を言いだすのよ！／＼／＼」

焦りながらよく言葉使いが地にならなかったとあとで称賛した

「だって、いつも一緒にいるのは今も昔も変わりないじゃない
キスだってしてるんでしょ？」

なら、そろそろしてもいいんじゃない？」

メアリーに言われた咲樹はつい想像してしまう

薫と深いキスをしながらベッドに押し倒され、衣服を脱がされながら自分の身体を触っていき、最後に――――

（無理、無理、無理っ――――！！／＼／＼／

恥ずかしすぎる！／＼／／

いや、そりゃ少しは興味あるけど・・・

うん、無理、無理！

恥ずかしすぎて、死ねる！）

もし咲樹の頭に煙突があつたら煙が勢いよく吹き出してたいるだろう

顔を真っ赤にしながら両手で顔を覆い、何か眩く旅に左右に身体を揺らす

一人で赤面し、トリップしてます

「あっ、あのサキ！？」

お願いだから、戻って来て！！」

自分で仕掛けて置きながら予想外にトリップした咲樹に慌てて現実

に引き戻そうとするメアリー

おかげで目を覚ました咲樹は恥ずかしいのだろう
下を向き、俯いている

「つまりまだシてない
図星なのね？」

メアリーの問いに咲樹はコクリと頷く

「いい？女は度胸よ？
アドバイスするからしっかり聞きなさい！」

こうして咲樹は女性になってから初めての女性の性勉強をした

—————

その夜

部屋に帰り、シャワーを浴び、後は寝るだけになった夜

（確かに薫は今まで信用できるし、今も頼りになって信用できる」
男

俺が『女』になったからか
異性にしか見れない時はあった・・・
認めたくなかったけどな

だけど、まあ俺も男だったし薫が理性の我慢はわかる)

咲樹は今振り替えて見れば薫の我慢強さに驚きしか思い浮かばなかった

(だから、うん

今はさすがに無理だけどこれくらいならいいよな／＼／＼)

「薫！」

「咲樹？寝るのか？」

携帯を弄ってる薫は首を傾げる

そんな薫に咲樹は一気に近づくと薫の顔をガッチリ両手で掴むと唇を重ねる

その間は一秒ほど

すぐに身体を離す咲樹

「これが今の気持ちだ！

この変態大魔王！／＼／＼」

それを言うなり咲樹は猫のようにベッドに素早く潜り込む

今日は咲樹が女の子になって大きな一歩を踏み出した日だった

オマケ
薫の脳内心理

ハアツ！？

キス！？

キスだとおおお！？

しかも小学生みたいなお子さまチューでもなく

アダルトバージョン

大人のキスだ

likeじゃなくてloveのキスですよ!?

今日1日で咲樹に何があった！？

しかもなんだよ、あの感触／／／／

めっちゃ柔らかえ上になんとか心地いい・・・

何あれ、最高やん・・・

気持ちよかったわ

あつ、けどな

最後のあの称号はヒデエ

あれって某RPGゲームシリーズでスケベな称号じゃねえか！

だが！！

「俺、マジで惚れていいツスカ？」

男性本能に忠実な薫君でした

.

第十五発目（後書き）

銃のリクエストあったら聞きます

感想で言ってください

第十六発目

――3、2、1

無線を通じ、合図と共に目の前の僅かに見える兵士をサプレッサーで音を押さえながら暗殺していく

咲樹と薫は吹雪の中、静かに暗殺して行きながら基地内部に進んでいく

遡ること約二日前

あの武器屋の情報を信じ、上層部は特務部隊に破壊工作を命令した
そして命令されたのは咲樹と薫の二人だった

「これは極秘任務だ

失敗は許されない

公にできない任務だからな
報告書も始末書も必要ない
必ずミサイルを阻止しろ」

軍の上官達のプレッシャーに耐えながらも二人は任務に了承した

そして今現在、咲樹と薫はサプレッサー&心音センサーを使い、基地内部への侵入をしていた

『咲樹、その建物を右に曲がったところが入り口だ
敵は？』

無線からの声に咲樹はサプレッサー&心音センサー付きのTRGの
スコープを覗く
赤外線式であるサーマルスコープであるため周りは青だが熱のある
人間は白く写る

「入り口に一人だけだ
俺が狙撃して倒す」

狙うは頭

パシュッ

距離は10メートル
だがこの吹雪の中だ
咲樹も相手も互いに姿は見えない

スコープ越しに見える白く映る頭部に風の修正を加え、狙う

放たれた一発は静かに相手の眉間を貫通し、命を奪った

「・・・クリア」

合図と共に薫は先行する

銃口を出しながら扉をあける

なにやら話をしている兵士が二人いた

（倒せるがな・・・

ヘルメしてるから、頭はキツイし・・・）

薫は銃剣をセットする

静かに二人に近づく

狙う一人目の喉を躊躇なく刺し、そのまま連射
首を蜂の巣にする

もう一人が振り向いてくるがそれと同時に抜いていたグルガナイフ
を相手の顎下から突き上げる

勢いよく血を吹き出しながら相手は身体を痙攣させながら倒れた

「クリア・・・ふう」

ナイフと銃剣の血を振り落としながら呟く

「大丈夫か？」

「ハハ、もう慣れたよ
なんともないさ」

心配してる咲樹に薫は笑顔で頭を撫でる

『人殺しに慣れる』

一般の高校生だった二人は数ヶ月で生きた人間を殺すことに慣れたのだ

「お前だけ辛い思いさせないからな」

「サンキュ」

二人はそのまま進む

「次を左に行つて、突き当たりを右、二本目のドアを開けて階段を降りる」

咲樹が小型の携帯のような機器に映しだされた地図を見ながら先行する薫に伝える

左に曲がり突き当たりまで行こうとした時、ちょうど三人組の兵士と鉢合わせになった

「マズイッ!」

薫はまだ武器を構えてない内に片付けるようとAKを連射する

一人、二人と片付けるが仲間に隠れてたもう一人が銃を構えていた

「クソッ！」

薫が標準を合わせようとした瞬間

ヒュッ！

耳元を何か通過した音と同時に敵が吹き飛び、胸を抑えて死んだ

「助かった、咲樹」

「まさか現実でクイックショットできるとは思わなかったけどね
銃声がなくて良かったよ」

互いに胸を撫で下ろす

二人はこの基地相手に正面からまともに相手をしたくないのだろう

「うわ・・・マジで潜水艦マップじゃん」

「咲樹、頑張れ」

階段を降りた先は中央に潜水艦が佇んでおり、たぶんまだミサイルを積んでいないのだろう

ミサイル発射口は中を空洞に開いたままである

そしてここは一階から三階になっており、
中央の潜水艦を囲むように道があり、潜水艦側の壁吹き抜けになっ
ている

つまり丸見え状態

狙撃しやすいマップだが逆もしかり
こちらの動きも相手にわかりやすいのだ

「あの潜水艦壊すんだよな・・・」

「ああ、後はデータを盗らねえと」

二人は物陰に隠れながら辺りを見回す

「けど、潜水艦マップ思い出す限りあそこだよな」

「だよな・・・」

二人が見る先には三階の中央にある少々大きめの部屋
しつかり壁で囲まれている

「どうする？」

破壊とデータ別れたほうがいいかな？」

「だよな・・・潜水艦はプロペラんとくにC4仕掛けてくれたら逃
げ道確保してくんね？」

逃げる時は絶対ドンパチだからな」

「わかった・・・即行で援護にいく」

そして二人は別れた

「とりあえず、一階だな」

二人が出てきたのは二階だ

薫は物陰に隠れながら反対側の通路行くため、向かって左側に行った

咲樹は降りてきた階段のほうに戻り、さらに階段を降りていく

（クリアかな・・・）

TRGを構えながらそつと1Fと書かれた扉をあける
通路には人影がない

そのまま吹き抜けになつて通路に出て、物陰に隠れながら水辺に
近づく

（実際見れば、そんなに深くないし、スクリーまで距離もないし
な）

咲樹は水音を発たせないようにそつと水中に潜る

（やっぱり冷たい！）

室内とはいえ、外は吹雪が降ってる極寒
当然、水温も低くなっている

しかし、咲樹は我慢しながら作業を続ける

そのままスクリーと船体真下にC4を設置する

「プハッ・・・」

咲樹はすぐさま水中から出て周りを確認

「さすがに全身ずぶ濡れは寒い・・・」

ずぶ濡れで吹雪の中に行けば凍死する自信があるだろう

移動しながらそう考えていると備え付けの自販機付近でタバコを吸
ってる一人の兵士を見つけた

「・・・ちよいと風邪を引いてもらおう」

咲樹はフラッシュバンを取り出し、辺りを確認

人影がああ兵士だけなのを確認すると目の前で止まるように投げる

そして兵士がフラッシュバンに目が行った瞬間
一瞬だけ強烈な閃光が辺りを包む

閃光を回避していた咲樹はすぐさま兵士に近づき、構えたコルト・
アナコンダのグリップ底で側頭部をぶん殴り、ついでに鳩尾を容赦
なく拳を入れる

顎にも掌底を入れようとしたがすでに気絶しているのに気づいた咲樹は兵士を近くに連れていく

「男もんだからデカイな・・・まあ、内側に防弾チョッキ着ればいいか」

来ていた服はその部屋のゴミ箱に男は荷物の影に隠し、部屋を出る

「まあ、これでいいか」

見た感じ少々大きめの軍服を来た女性兵士の完成だ

咲樹は吹き出し通路から薫の向かった部屋を見上げる

すると目標の部屋の窓に血が盛大に飛び散っていったぶん異変に気づいたのだろう

同じ階の通路にいた兵士が慌てて部屋に走っていた

（データをまだ取ってるんだ、行かせない！）

咲樹はすぐさま物陰に隠れながら狙撃体勢に入る

「距離20・・・せい！」

咲樹が撃った弾は男の横つばらを貫き、撃たれた勢いで半回転しながら地面に倒れた

『咲樹！データの回収は終わった！
援護頼む！』

「わかった」

咲樹はすぐさま全範囲にいる敵をターゲットにする

吹き抜けの通路はこちらの動きが丸見えなのだ

こっちの数は二人に対し、相手は基地単位

できるだけ減らしたほうがよいだろう

すると基地に警報音が響く

「こりゃ、本格的にヤバイ」

薫のほうに向かってる兵士を片っ端から狙撃してると薫が走ってきたのを確認した

咲樹は薫の走ってきた方向にグレネードを投げてから、残っていたC4を階段の見えないところに設置

先に階段を上り、階段上の安全確認

挟まれて身動きとれないのはキツイからだ

ドアを開け、左右を確認

「うわっ、やば」

スコープ越しに見れば距離はあるが10人近くの兵士が通路をぞろ

ぞろ走っていた

「薫、急げ！」

階段を上ってる薫を急かせ、まさに階段下から撃とうしてる敵にグレネードを投げつける

慌てて逃げる敵に銃は撃たれなかった

そして通路の敵を狙撃する

しかし、敵側も銃を打ち、通路に弾幕が生じる

「クッソ、吹き飛べ！」

コンカッション（強烈な音で相手の三半規管に衝撃を与え、一時的に動きを鈍らせる）とグレネードを投げる

動きが取れない上にグレネードという鬼畜ミックスに通路の敵は爆撃に巻き込まれる

「すまん、待たせた」

薫はそう言つとそのまま先行する

咲樹も薫に続く

走り、走り続ける

捕まれば死ぬ

二人は今まで感じた中でも最高の恐怖感が逃走する集中力を促していた

薫は曲がり角ですぐさまクリアリングをし、咲樹は追っ手用にクレイモアを仕掛けていく

（あと少しっ！）

薫は次を曲がれば出口

そんな時、曲がった瞬間敵と鉢合わせた

「クソッ！」

目の前に3人の敵

薫は銃剣で一番近い兵士の心臓に一突きすると咲樹がトマホークでもう1人の兵士の喉元に刺さり、崩れ落ちる

そこで残っていた兵士がAKS-47Uを吹かせる

狙われた薫は身を捻り、腕を掠めながらも直撃はさけた

薫を狙った兵士は咲樹のアナコンダに頭を撃たれ、絶命

「大丈夫か、薫！？」

「掠っただけだ、ナイスショットだ！
行くぞ！」

二人は基地に潜入した裏口のドアを開ける

兵士達が慌てていくなか

物陰に隠れた二人は車庫に目を着けた

「車を奪うしかないよな・・・この吹雪の中を走るのはキツイって」

「なら、俺が行く」

俺ならこの基地の軍服だしな」

そう言うなり、早速行動に移る

「おい、車を出せ！」

敵工作員が正面口から車を奪って逃走したそうだ！」

「なんだと！？」

おい、車を奪われたそうだ

おいかけるぞ！」

次々と車庫から出ていく中、咲樹も流れに乗るように運転席に座る

「おい、モタモタするな！早くだせ！」

「すみません！」

助手席に乗った兵士がそう急かす

次々と出ていく中、咲樹と兵士が乗る車は遅れていた

すると咲樹はニヤリと笑う

「油断大敵、敵は目の前だつつつの」

「はっ？」

それが兵士の最後の言葉だった

ガチャ！

いきなり助手席のドアが開かれ、薫のクリティカルナイフが兵士の腹に深々と刺さり、側頭部を咲樹のアナコンダに撃たれる

「出すぞ！」

咲樹はクラッチを切り、ギアをあげながらスピードを上げていく

「薫、C4爆破頼む」

咲樹は運転しながら遠距離爆破操作のスイッチを薫に渡す

吹雪が吹く中、咲樹は慎重かつ急ぎながら基地から離れていく

「あとは逃げて、帰還するだけだな
爆破完了」

カチツと押した瞬間

基地から大きな爆発音が響く

原子力潜水艦を破壊したのだ
爆破威力は跳ね上がるだろう

薫は通信子機を出し、軍に帰還要請を出す

「こちら特務部隊所属
アレン・フォーマットです
データの強奪及び目標の爆破完了いたしました
至急、応援お願いします」

「了解いたしました
データを今から送る情報の場所で会う人物に渡したあと、海外沿いの工場に行ってください」

通信が切れ、子機の画面にデータが送られる

「・・・帰還するにしてもずいぶん遠回りだな」

「なんて書いてあるんだ」

追っ手がいないことに咲樹は少し安心し、余裕を取り戻し、口調も落ち着いていた

「基地の麓ふもとの街に入って、データの廃屋にあるトランクケースに私服があるからそれに着替え、
駅前のホテルのロビーに待ち合わせしてる男性にトランクケースに移したデータを渡したあと
港の工場で迎えにくるらしい」

「確かに・・・けど極秘任務だし、慎重に慎重を重ねる必要があるんじゃない？」

「そうか・・・」

咲樹の返事に薫は頷く

なぜか薫は納得できない・・・いや、この通信に不安を抱いていた
おかしいと・・・

「おっ、街だ」

咲樹はパツと笑顔になる

だが薫は笑顔になれない気持ちだったが、気持ちを切り替える

「とりあえず街の近くで車を棄てたあとに街に入るか

さっさとデータ渡して基地に帰って暖かい飯食おうぜ？」

「おっー！」

二人はテンションを上げて街を目指す

しかしこの時、二人は知らなかった

自軍上層部が出した冷酷な指示を・・・

.

第十六発目（後書き）

ロシア語など外国語が理解できる理由

咲樹や薫が転生した際に人格や記憶を共有し、脳自体はサキやアレ
ンの物なので知識も共有している

なのでロシア語を理解できたのだ

これと同じ理由で高校生の咲樹が運転できたのだ

ちなみに・・・

サキ・咲樹はロシア語、フランス語、英語、日本語を
アレ・薫はロシア語、英語、日本語、ドイツ語

しかし！

作者は日本語しか理解できていないんで外国語は登場するかわかり
ません

「俺は日本人だし、日本で暮らすんだ
外国語なんて使わないぜ！」

自分の親友が豪語した言葉に共感しました

第一七発目（前書き）

これはフィクションであり、現実のものではありません
作者の妄想から作り出されたおとぎ話のようなものです
ですから・・・無茶ぶりがありますよ

第一七発目

「ずいぶん寂しいホテルだな」

「そりゃあ、こんな辺境基地近くだしな
ビジネスホテル並みだけマシだろ」

咲樹と薫はホテルのロビーでデータを受けとる人物を待っていた

2人の服装・・・

ボロボロの家にあったトランクケースには私服というよりスーツがあり、防寒用にロングコートがあった

2人はすぐさま着替え、武装はトランクケースに入るように分解し、ハンドガンやナイフはロングコートの内側隠す

ビジネスマンの取引のような2人はロビーのテーブルでミルクティーなど飲みながら待ち時間まで待っていた
金は服と一緒に少しばかり入っていたのだ

しばらくすると紺色のスーツを来た金髪短髪のサングラスをかけた男性が歩みよって来た

「フォーマット大尉とミーシリア中尉ですね？」

「お前は！？」

2人の前に現れた男性・・・いや、青年は特務部隊の後輩に当たる青年だ

ロイアット・アイン

元気なのが取り柄で20という若さで入隊したルーキーである
アレンとサキに次ぐ逸材と言われ、ムードメイカー的なキャラだ
歳も近いことで2人をよく慕っていた

「・・・アレン先輩、サキ先輩
データを・・・」

「あつ、ああ・・・」

ロイのいつもと違う、生真面目な雰囲気戸惑いながらも薫はコク
りと頷き、データの入ったトランクケースを渡す

するとロイは周囲を一度見渡し、耳に着けてた通信機を切った

そして焦りながら説明する

「先輩・・・今、軍隊が街に降りて来てます」

「やっぱり、降りてきたか・・・」

「ロイ、脱出の手筈は？」

薫の舌打ちに咲樹はロイにそう聞くと、彼はフルフルと首を振る

「・・・ありま、せん」

先輩達には脱出の準備がありません」

「えっ・・・？」

ロイの震えた答えに咲樹は耳を疑った

「どういう・・・こと？」

「軍の上層部は・・・先輩達を捨てました
情報の入手と潜水艦の破壊破壊したあと余分な情報を知ってる先輩
達を消すことにしたそうです・・・」

「んな・・・ばかな・・・」

薫はガクガクと足が震え、咲樹は信じられないといった表情だ

ロイはそんな二人にすぐるような目で持ってきたケースなどを渡す

「・・・これは渡します

そして必ず生きてください

俺はあなた達先輩には生きて欲しいです

もし・・・ここに行けばライデン隊長が助けてくれます」

渡されたのは一つの携帯とトランクケースとカードの入った財布

それと同時にホテルに三人ほどの武装兵士が入って来た

「俺が時間を稼ぎます・・・」

兵士が出たら一般人を装って出てください

これはお金です・・・

絶対生きてください、先輩！」

今にも泣き出しそうなロイはそう強く言うとともに表情を切り替える
こんな性格でも特務部隊の一員だ

ロイはロシア語で何か言うとともに兵士達と一緒にホテルを掛け出ていった

「・・・咲樹」

「薫・・・」

多分2人の表情はまさに絶望という表情だろう

だが、先ほどの説明と兵士・・・

嘘ではないだろう・・・

余分な情報・・・末端の兵士には要らぬ情報を持つてるのは上層部
からすれば余分な芽

替えはいくらでもいる・・・何千万という兵士の中の2人だ

咲樹はふつつつとなぜか冷静になっていく

まるであのテロ事件のように

「薫・・・行こう」

何がなんでも生きなきゃ」

「どこに?」

「その携帯に載つてるところに」

「どうやって行くんだ?」

「見てみるよ・・・インドのあの店だぜ?」

そう・・・

携帯に載せられた住所を調べたら、そこはインドのあの店だった

「駅から逃げればいい」

「封鎖されてんのか?」

その言葉に咲樹はコクリと頷く

「わかつてる・・・」

だからここにいる兵士に見つかればいい」

「なっ!」?

それじゃあ、意味が「で全員倒す」

「はっ?」

本日二回目である

耳を疑った

今、咲樹は全員倒すと言った

つまり少なくとも50人近くを相手にすることだ

「弾なら無限にある

サブミッション、孤城戦を実現するだけ

だからこそ見つけてもらう」

孤城戦――――

ある工場にある三階建てのビルの屋上で5ラウンドに別れて次々と現れ、攻めてくる兵士を倒しきればいいというゲームだ

兵士のは数は1ラウンド20人ほど

だが現実にはやるとしたらかなりキツイだろう

しかし逆にこの街で逃走劇をやるよりも成功すればかなりの確率で生き残れるだろう

今のうちに準備をして迎え撃つ

「ロイには悪いけどここから一般人装って脱出なんて無理だ
周りは海と雪

駅は封鎖だからな

だから脱出じゃなく迎撃

それにさ……

俺はまだ諦めてないさ

この戦争、クリアしてないし、俺たち死んだらメアリーだってきつと悲しむだから帰ろう？

生きて帰ってメアリーの迎えに行こう」

「咲樹……」

今まで何かしら面倒を見てきた弟のような幼なじみがいつの間にか大切なパートナーになっていた

そしてそのパートナーが今、大きな賭けに乗ろうとしている

そんなハイランクな賭けに薫は自分で何か吹っ切れた感じになり、同時に今の咲樹に感謝した

「ったく……昔から怖がりな癖に結構難しいこと言いやがってさあて、さっさと準備するか……」

敵さんが気づく前にやらないとなただの孤城戦じゃ勝てないしな」

薫は不敵に笑みを浮かべる
スイッチが入ったのだろう

「ハハハ、薫やる気出たんだ」

「ああ、それに今思えばストーリー通りじゃねえか
プレデターが出た時点でドイツ国境沿い防衛戦のストーリーが始まる前だったんだ

あのストーリーだと2人の諜報員の犠牲でプレデターというアメリカの武器が使えるようになったって説明あったろ？

つまりその2人は俺たち

だが生憎、俺たちはストーリー通りの2人じゃないからな」

「そういえばそうだよな・・・

で、孤城戦やるにも

まずは脱出ルートの確保だよな

やっぱり電車が一番なんだけどあの検問がキツイしな・・・」

そう悩み始める咲樹を見た薫は笑いながらポンポンと咲樹の頭を優しく叩く

「まったく、脱出ルート考えずに決めたのかよ

んなもん――」

ここから始まった

咲樹と薫にとってここからがより過酷で、仲間もいない『2人』だけの戦いが――

「密入国に決まってる」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1846s/>

スナイパー & アサルト

2011年11月20日00時16分発行